
眠れないほど好き 業平商事シリーズ

JunaiJoule

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れないほど好き 業平商事シリーズ

【Nコード】

N8580Z

【作者名】

JunaiJoule

【あらすじ】

世界有数商社・業平商事を背景にしたロマンティック&ふわりラヴエンド短編集（♂エリート×♀年下）OL/上司/社長/御曹司/オフィスラヴ 短編集【ふいるふいーる】より独立させました。新作【何度でも恋をする】**HP純愛ジュールより投稿**

眠れないほど好き（前書き）

ちよつとさみしい季節。頭の中がぐちゃぐちゃしてよく眠れない。
OL×上司のキュートでお洒落な社内恋愛

眠れないほど好き

「お疲れさまでした」

あと少して仕事を終わるという頃、支店長代行の唐沢那智かさわなちが上のフロアであつた営業会議から戻ってきた。

支店長は八月から病氣療養中で、唐沢はその代行として、世界有数といわれる商社、業平商事なりひらの本社から派遣されてきた。

まだ三十二才という若さながら、さすがに基本が本社所属というだけあつてやり手だ。まず、決断するのにためらいがない。それだけの自信があるのだろうけれど、“上から目線” ということはなくて、部下が年上となるとそれなりの敬意が見える。

先月になつて十二月から支店長が復帰することが決まり、引継ぎも含め、唐沢がいるのもあと一カ月くらいだ。

「ああ、お疲れ。市羽さんいちば、おれ、今日の会場ははじめてなんだよな」

唐沢はわたしのデスクまで近づいてきた。

今日は居酒屋で同僚の茜あかねの送別会だ。いわゆる寿退社。すでにほとんどの支店社員が会場に向かつている。このフロアもいまはわたしだけだ。

「あ、そうなんですか」

わたしが答えたとき、ちょうど営業課の今期新人、志穂が戻つた。今日は会議補佐の当番だつたらしい。

「もうちょつとやり残してることがある。待っててくれないか？」

「いいですよ」

唐沢がこういう頼み事をしてくるのはめずらしくない。いつものこととわたしが承諾すると、唐沢はうなずいて奥の支店長室へと消えた。

「お疲れさま」

志穂に声をかけると、何か云いたそうに見られた。結局は、お疲れさまです、と答えるだけで、志穂は後片づけを始めた。

それから二〇分くらいして、わたしは唐沢と会場まで歩いて向かった。会社からそう遠くないけれど、ちよつと道が入り組んでいる。十一月も半ばになって道沿いに吹く風は冷たく、この時季は一年の終わりという感じがしてちよつとさみしい。今年は焦りみたいなのがプラスアルファで現れた。ここ一カ月、頭の中がぐちゃぐちゃしていてよく眠れない。

二十五才という年に因^よるのか。響き的に二十四才まではまだって感覚があるけれど、二十五才となると馬鹿げたことはやれそうになり大人の域に入った感じだ。それはまもなくのクリスマスのせいでもあるだろう。クリスマスが二十五日じゃなくて五日だったら、売れ残りなんて云われなくてもすむのに。

それはともかく、上司とふたりというのは緊張する。普通の上司よりは年が近いぶん、まだマシではある。

唐沢はこっちの生活が慣れないだけに、何かと私用でわたしを借りだした。総務という職を考えると仕事の一環といえなくもない。唐沢はわりと碎けた話し方をする。それでも馴れ馴れしくすれば失礼に当たるだろうし、わたしはいつも距離を置いている。

「唐沢代行、あと少しでこっちも終わりですね」

「ああ。せつかくこっちの雰囲気慣れたんだけどな」

唐沢の声は本当に残念そうだ。

「もしかして気に入ってもらえました？」

そう訊^{たず}ねると、唐沢はふとわたしを見下ろした。何か云いたげに見える。

「ああ、けつこう気に入ってる。っていうより、こういうふうに入るのははじめてで離れがたい。東京に持って帰りたいな」

唐沢は大げさすぎることに加え、不可能なことを答え、わたしは

おもしろがって見上げた。街灯の下、笑っているのが見えたのか、唐沢も合わせてふっと笑みを漏らす。

「持ち帰るって無理ですよ」

「残念だな。ま、頑張ってみる」

唐沢はそう云って肩をそびやかした。

どこか云い含んだ口調で、頑張っても持ち帰れないと思ったけれど、冗談だろうし、ちよっと笑ってわたしは聞き流した。

それから会場に着くまでの十五分、当たり障りのない世間話と仕事の話で、上司とふたりきりの時間をどうにか切り抜けた。

「ありがとう、助かった」

「いいえ」

笑みを浮かべて答えながら『業平商事様』と記された戸を開けると一斉に注目された。最後に行くところだから嫌なのだ。わたしは気づかれない程度にそつとため息をついた。

「有紀^{ゆき}、飲んでる？」

右隣に座った今日の主役、茜がビール瓶を差し出した。

「適当に飲んでるよ。それよりわたしはさみしいんだよ？」

「さみしいって？」

「茜はさきに結婚しちゃうからわかんないだろうけど、なんだか友だち盗られちゃう感じ」

茜はふっと吹きだした。

「有紀、ありがと。そう云ってもらえるような友だちがいてうれしいよ。そのわりに秘密を打ち明けてくれないって矛盾してるよね？」
たしかになんでもかんでも喋^{しゃべ}っているわけではないけれど、茜が云う『秘密』に心当たりはなく、わたしは眉をひそめた。

「……なんのこと？」

「んもつ、そこまで秘密にしなくってもいいのに。どうせ私は今日でやめちゃうんだから。まあ、いいわ。東京で吉報^{きうほう}を待ってるからじゃ、挨拶回りやつてくるね」

わたしが考えこんでいる間に一方的に云い残し、茜はわたしの左隣にいる経理課長の横に移動した。

業平は結婚退職を勧めているわけではなく、むしろ引き止められる。茜の場合は、ご主人になる人が結婚と同時に転勤になるらしく、というよりは転勤を機に結婚を決めたみたいで、転勤族という以上、引き止めるには無理がある。

わたしが落ち着かなくなったのは、茜がいなくなるとわかった二カ月くらい前だろうか。

高卒で業平の九州支社地方支店に勤めだして七年がたつ。総務職について仕事をつかむのに一年、慣れるのに一年、余裕の三年目からはひたすらにベテラン街道をまっしぐら。

オフタイムではそれなりに遊んできたけれど、カレシについてはピンと来る人はいなくて、流れで付き合ってもやっぱり続かず、ただ面倒くさくてリタイア。

美人でもないくせにわたしはわがままだ。念のために自己申請すると不細工でもない。たぶん。

自慢じゃないけど上司受けがいいことはたしかだ。競争率の激しいなか、高卒というレベルで採用されたこともその証明かもしれない。

結婚ということを考えれば、上司受けしたところでなんの利もないけれど。だいたいが既婚者ばかりだし。

あ、そっか。唐沢は独身だけど上司なわけで、何かと用を云いつけられるのは、総務職という仕事柄じゃなくて唐沢にも受けたのかもしれない。

それはそれとして、このぶんじゃ、クリスマスもとつくに過ぎて年越しちゃう、なんていう人生になってしまいそうだ。

もう馬鹿な遊びもできなくなり、結婚するにはだんだんと条件も狭まっていく。独身の友だちも減りつつあってさみしすぎる。いや、

結婚したいわけじゃなくて、常に気兼ねなく会える人がいればそれでいいだけのこと。

そもそも、これまで好きと思う人はいても絶対好きっていうところまでの人はいなくて、まず恋して泣いたことはない。そのあたり、自分でも冷めていると思う。失恋して痩やせるとか眠れないとか、わたしにとっては密ひそかな憧れだ。

要するに女友だちがいればいいんだけど、彼女たちはカレシができたら当てにならない。

いまさらピンと来る人と出会う可能性は低い。わたしの未来って明日、つまり明るい日というより、もはや落日という感じだ。

わたしは内心でため息をついた。とたん、空いた茜の席に誰かが座りこんだ。

「市羽有紀さん、きみって固いつて云われない？」

フルネームで呼びながらなんの前置きもなく不躰ぶしつけに訊ねたのは唐沢だ。

「……そう見られるみたいですね」

わたしは他人事のように答えた。

固く見られるということは、茜に云わせればお得らしい。いいかげんに扱われる確率が減るという訳だ。わたしからすれば近づき難くにくて避けられている感がある。けっして固くはなく、逆にだれかといたくて、いいように流されるタイプなんだけれど。

「みたいつてことはそうじゃないってこと？」

「固いつもりはないんですけど」

「へえ」

意味ありげな相づちだ。

「……なんでしょう？」

「いや」

短い返事と一緒に何か含んだような笑みが返ってきた。

わたしはこの唐沢のイメージを間違まちがって捉とらえていたんだろうか。

いまの口調は碎けすぎている気がした。

おまけにいまの姿勢は誉められたものじゃない。胡坐あぐらを掻かいて片肘をテーブルについて、軀はまるつきりこつちを向いている。部下たちに格好つかないんじゃないだろうか。いや、こんな格好でも唐沢はなぜか様さまになっっているのだけれど。

最初の唐沢の印象はいかにもエリートっぽくて冷ややか。仕事をしていくうちに、バリバリのやり手でも驕おごりがなければ礼儀も欠いていない完璧型人間とわかった。真面目に超を付けてもおかしくないくらい品行方正だ。お酒の席でも乱れない。

さつき一緒に来たときだつて至つてスマートだったのに、目の前にいる唐沢はまったくイメージが違っている。

ほんの数年前の二十才前後、わたしは中学時代の友達に誘われてよく一夜限りのお遊びをしていた。いや、如何いかわしい遊びじゃなくて、とある場所に行くとお会いを求める男女それぞれのグループが集まっついて、意気投合したら朝までドライブ、なんてことをしたり。単なる暇つぶしみたいなもの。物騒な世の中だけど、危ない目に遭つたことはない。

いまの唐沢はそんな男たちと同じくらい軟派に見える。

わたしが思わず軀を引くと、唐沢はにやりとした。

「唐沢代行、二次会には行かれますよね？」

不意に志穂が割りこんできて、対処に困つたわたしはほつとした。

「いやパスだ。大事な用事がある」

そう答えた唐沢はいつもの仕事口調だ。

大事な用事ってなんだろう。こつちに知り合いはいないって云つてたし、ということは仕事なんだろうか。そこまで仕事中毒とは恐れ入る。

「そうなんですかあ」

わたしが絶対やらない甘えた云い方で、志穂は可愛く口を尖とがらせ

た。ほぼ一回りという年の差をものともせず、赴任当初から志穂が唐沢を狙っているのはみえみえだ。

たしかに唐沢は女性から見て十分条件がそろっていて、誘われたら断る人なんていないだろう。逆に、それでも独身というのが引つかかるけれど。縛られたくないのか、女嫌い、微妙に逸^それて男好き、もしくは片想い中。いやそれ以前に、茜のようにきつかけがあればすぐにでも結婚できる彼女が東京にいるのかもしれない。

あ、そっか。大事な用事ってその彼女に電話でもするのかも……。そう考えるとため息が出た。

何、このため息？ やっぱ取り残された気分。まあ、どうでもいい。すぐにいなくなるんだし。

本社に出張することはあるけれど、よほどの偶然ですれ違わない限り、唐沢と会うことはない。

せめて夢見る志穂のお手伝いでもしようか。

そう思ったわたしが席を空けるより早く、

「じゃ市羽さん、あとで」

と、唐沢は意味不明な言葉をかけて席を立つた。

「やっぱり、唐沢代行と市羽さんて何かあるんだ」

ぼかんとした間抜けな顔のまま、唐沢の背中から志穂に目を移した。むっつりした志穂の発言もまた意味不明だ。

「……やっぱり？」

「惚^{とほ}けないでくださいよ。付き合ってるって噂ですよ。市羽さんはまるつきりポーカーフェイスですけど、唐沢代行はあからさまですもんね」

付き合ってる？ 市羽さんと唐沢代行？ 知らなかった……。つていうか。

「市羽さん、て、わたし？」

「うちの支店にはほかに市羽さんていませんけど」

志穂はとても先輩への口調とは思えないほどつつけんどんに云った。

「あーあ。わたしのほうが若くてイケてるはずなんだけどなあ」
失礼極まりない文句をぶつけ、志穂は自分の席に戻っていった。
わたしは無礼に怒るよりも呆氣にとられた。思わず唐沢の姿を探してしまった。営業課長と話していた唐沢はわたしの視線に気づいたのか顔を上げた。

にやりとした顔が獲物を狙う豹^{ひょう}みたいに見えたのは気のせいだろうか。瞬^{まはた}きしている間に、唐沢は営業課長に目を戻していた。
どう……ということ？

もやもやしたまま一次会はお開きになった。精算を任されていたわたしが店員と話しているうちに全員が会場を出ていった。

お手洗いに行つて化粧直しをして店を出たときは、薄情にもだれも見当たらない。

もしかして……置いていかれた？

……こんなところで売れ残りならぬ置いてけぼりってちょっとショック。ありえないし。

「市羽さん」

不意打ちで後ろから声かけられ、わたしはびくつと肩を揺らし、振り向いた。

「か……唐沢代行。心臓、止まりそうになりました。みんなはもう二次会に出たみたいですよ」

唐沢はゆっくりと寄りかかっていた店の壁から躰を起こした。

「おれはパスって云ってるから」

「あ、そうでしたね。大事な用事あるって……」

唐沢の人差し指が向かってきて、わたしは言葉を切った。

「なんですか？」

「大事な用事」

「え？」

「市羽さんに大事な用事がある。ちょっと付き合って」
「え？」

唐沢は背を向けて歩きだした。唐沢の言動についていけず立ち尽くした。用事がわたしにあると云ったわりにわたしを置いてさっさと歩いていく。ああ云われた手前、上司を放るわけにもいかず、唐沢を小走りで追った。

気づくと会社の前まで戻っていた。往きを案内しただけで復路を迷うことなくなったり着けるあたり、妙に感心した。

唐沢はそのまま通り過ぎ、ちよつと先のマンションに入った。こちにいる間、唐沢が借りているマンションだ。何度か、頼まれて私物を調達して持っていたことがある。

唐沢は二階まで階段を上り、部屋の前で立ち止まった。

「唐沢代行、何か入り用ですか?!」

さすがに不安になって、訊ねた声は不自然に大きくなった。

「必要なのは市羽さん、て云ったら？」

「え？」

「これでもかなりアプローチしてきたつもりだけど、通じなかったみたいだ」

「え？」

「例えば、事あることに市羽さんを指名したり」

「は？」

「つまり、おれは市羽さんに惚^ほれてる」

「……」

「固くないって云ってたし、きつかけは逃さない主義。入ってくれるかな。何が起きるか保証はしないけど」

唐沢は部屋を指差した。唐沢は意思表示をするためにここまでわたしを連れてきたらしい。その意味がわからないほど鈍感じゃない。

「……わたし……人をそこまで好きになったことなく……その……たぶん “保証されないこと” は、はじめて……なんですけど」

「市羽さんが固くてよかった」

「だから固くありません。置いていかれるのが嫌で、けっこう流されるんです」

「なるほど。じゃ、誘えば乗ってくれるわけだ」

唐沢は招くようにドアを開いた。

わたしはためらった。常に、じゃなくて期限付きなら、さみしさはかわらない。

そう思ってみて気づいた。唐沢との間に距離を置いていた理由も眠れなかった理由も。

わたしにもきっかけは与えられた。

「えっと……一度、眠れないほど人を好きになってみたいと思ってるんですけど」

「ふたりで挑戦してみるってのは？」

「どういう意味ですか」

「眠らせない方法はいくらでもあるってことだ」

唐沢は獲物に照準を合わせた豹みたいに闘争心剥きだしだ。それとも食欲？

「……」

「眠れないほど好きって人がいないらしいし。それなら市羽さんの不安をなくすために、遠慮なく保証できることが一つある」

唐沢は戸惑ったわたしに駄目押しを仕掛けた。

「……なんですか」

「本社に戻るときは市羽さんをさらってく」

唐沢は、どうする？ と無言で問うように首を傾けた。

そのさきに失恋したとしても、それで痩せるっていうのも憧れだし。

さみしさを引きずるよりは、眠れないほど好きでいたい。

わたしは開いたドアの未来に飛びこんだ。

adding. The End. Many thanks for re

眠れないほど好き（後書き）

ブログ仲間さんのお題「見えないもの」よりできた作品 09
10月企画

Published in 05 Nov, 2009.

大人の純情 少年のように（前書き）

* 大人だって恋には戸惑う！的な物語／2部作
まずは男性サイドです。

大人の純情 少年のように

このダイニングバーで彼女を見かけるようになったのは一年半前だ。

一見すれば美人聡明。よく見ていると、幼さ——いや、無邪気さが見え隠れする。

そうだ。おれは、見かけるといよりはよく見ているに違いない。彼女はいつも男連れだ。

男は彼女をもて囃しぎみなのに比べ、彼女はどこか上の空で、男を見ているようで見ていない。

ただ一人、彼女が“見ている”男がいる。

そして、“見ている男”と“見ていない男”が鉢合わせする。見ていない男が去り、見ている男もまたそのあと去る。

残った彼女はゆっくりとワインを口にしながらそこに留まって、泣きそうな顔で独り笑みを浮かべている。

そう見えるのはおれの気のせいかもしれない。なぜなら、そのうち彼女はまた別の見ていない男を連れてくる。彼女を見るようになってから三回、同じことの繰り返し。

それがパタリと止んだのは半年前くらいだろうか。彼女は来なくなった。

どうしたんだろうか。望みは、あたりまえだが、おれの知らないところで潰えたのかもしれない。

バカだな。

何をそう思ったのか、望み自体もよくわからないまま、折り合いをつけようとしていた。それが今日、彼女が現れた。おまけに連れは男じゃなく女だ。

「いま独り？」

何をやってるんだ？ と気づいたときは遅く、彼女が傍に立ったおれを見上げた。

「え……二人ですよ。いまお化粧室に行ってるんですけど」

彼女は驚いたように応え、そして表情は怪訝そうに変わった。当然の反応だ。驚いているといえ、おれ自身もそうだ。それよりは呆れているかもしれない。

「いや、そういう意味じゃなくて。カレとかご主人とか」

そう訊ねたとたんに、可笑しそうな、もしくは余裕たつぷりの艶やかな笑みがくちびるに宿る。彼女のこんなふうになにに感じる笑いははじめて目にしたかもしれない。しかも目の前のことであり、だめだ。

内心でつぶやき、まるでガキに還ったかのように焦った躰が冷や汗を吹く。

「そう云う……えっと？」

彼女は曖昧に云って首をかしげる。

「田辺譲、三十三才」

「わたしは立花美里、二十八才。そう云う田辺さんのほうが『独り』じゃおかしい気がしますけど」

彼女はおれを真似て名乗ると、さっきの続きを云い足した。

自惚れているわけではないが、彼女がほのめかしたとおり、寄ってくる女はいる。が、寄ってほしい “彼女” は寄ってこない。それどころか眼中にさえ入っていないかった。

「あー、選り好みしてるってよく云われる。けど、選るまえに好む人に巡り合っていないことのほうがおれにとっては問題だ」

彼女はくすくすと笑いだした。それから、どうぞ、と空いた椅子を指差す。

「連れがいるようだし、邪魔しちや悪い。けど今度……」

おれは胸ポケットから名刺入れを取りだし、同時にポケットに差したペンを手に取って名刺の裏に携帯番号を書いた。

「表は仕事用。信用できないなら会社に電話をくれてもかまわない。それで、教えてくれるかな」

名刺を渡ししながらそれとなく催促してみると、彼女はおもしろがった様子であっさり教えてくれた。

簡単に、それも初対面の人間に携帯番号を教えるとは危なっかしい。その小言は、自分が訊いた手前、矛盾している。内心でしかめつつも、一方では連絡手段を得たことが単純にうれしいと思う。

それが、嘘でなければ、の話だが。

そしてそれは嘘ではなかった。

家に帰ってまもなく――。

「田辺だ」

相手が彼女だと信じて、電話が通じると同時に名乗ると、間違いなく今日、目の前にしたのと同じ笑い方がおれの耳に響いた。

* * *

『譲、明日は大丈夫なんだよね？』

木曜日の夜、美里から電話が入った。

「ああ、問題ない。急ぎの仕事は入ってないから」

『そう……よかった。譲……』

なぜか美里の呼びかけはためらった気配だ。

『どうした？』

『うつん。わたしのこと、嫌になってない？』

「なんでそんなこと訊くんだ？」

「なんとなく」

そう答えた美里はいつものとおり、おもしろがった声で笑った。

それから、じゃあね、と電話は切れた。

美里とは付き合ってから半年を過ぎた。

おれから声をかけたのははじめてのことで、嫌になる、とかそういう気持ちはまるで次元の違う発想だ。

美里はどこかちぐはぐで、自信に溢れているかと思えば、時折、不安そうにおれの顔を窺う。

彼女はおれをよく見ている。

それさえあれば問題ない。

だが、この怖れはなんだ？

二カ月前、三月の終わりから美里の様子が微妙に落ち着かなくなつた。

それは前兆のように思えた。

なんの？

決まっている。同じこと、の繰り返し。

それでも美里がおれを “ 見ている ” かぎり、 “ 同じこと ” とは違うはずだ。

その確信とは裏腹に、信じている、というよりは、信じたい、という本音は嘆かわしい。

翌日、ぐずぐずした自分にちよつとイラつきを覚えながら、ダイニングバーに入った。

とたん、あの “ 見ている男 ” が目につく。おれは入り口に立ち尽くした。

斜め向かいという位置に座った男を見上げて何やら話しこんでいるが、そこには美里がその男にしか見せない表情がある。普通に話している、いまのように笑って話していてもその表情は消えない。

なんだ？

苛立ちのままに席に向かった。

見ていない男たちが立ち去る理由、それがやっとわかった。

約束しているのに別の男という。“男と女”に進展しない状況下、大人ならそれを別れと受けとる。

対峙^{たいじ}すべき相手が極上なら尚更。

おれを甘く見るな。

ガキじみたプライドがつぶやいた。

「ここ、いいんだよな」

返事を聞くまえにおれは男と向かい側の椅子を引いて、これ見よがしにドサリと座った。

遠くから見ても見栄え^{みば}のする男だが、近くで見るとさらに雰囲気^{きふき}に圧倒された。おそらく美里とかわらないくらいの年だろうが、冷たさと相俟^{あいま}って毅然^{きぜん}とした眼差しには、このおれですらためらいを覚える。

男はおれから美里に目を移した。険しく眉をひそめ、首をひねったあと、その声を聞く間もなく男は立ちあがって出ていった。

美里は独り笑う。斜めに位置しているせいで、美里のうつむけた顔がこれまでのように泣きそうにしているのかは読み取れないが、口もとは笑うように両端を上げているのが見て取れた。

口を開く気にもなれず、美里が何か云うのを待っているわけでもなく、喋ったほうが負けだという、まるで我慢比べのようにおれたちのテーブルは沈黙に満ちた。

「美里、おまえと結婚したい」

結局はその我慢比べに負けたのはおれだ。しかも、潰れたプライドを直視できず、おれは席を立った。勘定票を持ってレジに行き、投げるようにお金を置きながら、釣りはいらぬ、と腹立ち紛れに云って店を出た。

くそつ。バカやろつ。

しばらく歩いて、店に沿った花壇の煉瓦れんがに蹴りを入れた。が、痛んだのはおれの靴と足の指先で、煉瓦はびくともしない。

通りすがりのカップルが可笑しそうにおれを見ていく。酔っぱらいだと思われたに違いない。

何、ガキみたいなことやってんだ。

内心で吐き捨てる、その言葉が節度のなさをおれ自身に悟らせ、イライラが収束していった。

苛立ち紛れに結婚を申しこむなど大人気ない。

頭が冷えていくにつれ、おれは気づく。

立ちあがる寸前、顔を上げた美里の表情。それは心許なく、あの
見ている男に対して消えることのない表情だと気づいた。そう、時
折おれを窺う表情と同じだ。

バカヤロー。

おれは情けなくつぶやく。

そこにはなんらかの美里の傷みがあるはずだ。

「譲」

おれが引き返そうと振り返ったのとほぼ同時に、店を出てきた美里がおれの名を呼んだ。

「あの人は高校のときの一つ上の先輩で、いまは同じ会社にいるの。それで相談とかよく乗ってもらってる。先輩は一年間、中国行つて三月に帰ってきたばかり」

なるほど。それで “同じこと” がパタリと止んだわけだ。だが、そもそもそうする理由はどこにある？

「それだけじゃないよな？」

「……ホント云うと、高校のときに付き合ったことがあって、でもふられちゃった」

おれが促すと、美里は肩をすばめておどけたように打ち明けた。

そうやって傷ついたことを大したことないと思わせなければならぬ
いほど、美里が傷ついているということだけはわかった。

「だからなのか？」

「なんのこと？」

「近づこうとすると避けるから。手も握れないし……キスもできない」

露骨に付け加えると、美里は苦笑いをした。

「ちよつと……怖いかもしれない」

美里の答えは意外なものでおれは顔をしかめた。それを見た美里が慌てたように告白を継ぐ。

「あ、乱暴されたとかそういうことじゃないんだよ。そういうのは全然別の意味で、わたしが勝手に怖がってるだけ」

「だから、付き合いが深くなるまえに今日みたいなことやって男を切るのか？」

「……見てた？」

「おれがナンパしたのは、あの日に限って偶然一目惚れしたってわけじゃない」

遠回しに云うと、ばつが悪そうにしていた美里は可笑しそうにして、店先から近づいてきた。

「これまでの人と譲は全然違うの。でも譲もわたしのこと呆れちゃ

——

「でも、からさきはいらない」

おれは美里が見ていない男じゃない。あの見ている男を含め、彼女が男を追うなんてことがこれまでであったか。おれはプライドを組み立て直した。

おそらく、美里はどこか自信をなくしている。いつか、美里の自信も立ち直ることがあれば——いや、おれがいることでそれが成立するのか。

「来週は六月だし、結婚するにはちょうどいい。月曜日は遅刻だ」

おれの独断に、美里は返事をしないでただ笑う。それはまるで無邪気で。

それから美里の手がおれに向かって伸びてきた。

その意味に気持ちも躰も逸る。

傲慢と云われようが、どれだけだっておれは訴える。

おれを見てろ。

つかみとるように握りしめた手はおれの手にすっぱりと納まり、

そしてその頼りない小ささに心底しんていが震えた。

それをごまかすようにおれは笑う——少年のように。

- The End . - Many thanks for
reading .

大人の純情 少年のように（後書き）

ブログ仲間さんのお題「バカヤロー」よりできた作品 10, 5
月企画

Published in 06 Jun, 2010 .

大人の純情 最後の恋 - 1 - (前書き)

* 2 部作 / 彼女編 / 全 4 節

手に持った携帯電話を鏡台の上に置くと、椅子に座って立花美里という自分の顔と向き合った。

いくつになっても、独りでいると不安そうなの、ともすればおどおどしたような表情は消えてくれない。全部、自分のせいだとわかっている。だれかに消してほしいと頼るのは子供すぎるのだろうか。

わたしはいったん置いた携帯電話を手にして、呼びだしボタンを押した。

「わたし、美里」

『ああ。ごはん、食べた？』

答えた声はいつものとおり、からかうような口調だ。低音で特別な周波を出しているらしく、わたしは特に電話の声には眩暈がしそうになる。

電話の相手、田辺譲とは付き合って半年になる。わたしと譲の年ではどうかと思うような、ナンパから始まった。

「もう十時だよ。いまから食べたなら太っちゃう。譲は仕事終わった？」

『もう十時だ。仕事を持ち帰るほど熱心じゃない』

譲は云い方を似せて返し、わたしは緊張しているにもかかわらず笑えた。譲はわたしをリラックスさせるのがうまい。

それに、仕事に熱心じゃないわけない。譲は年配のパートナーと一緒にコンサルティングの会社を経営していて、企業家の間では評判もいいのだ。職業柄、熱心でなければそういう評判は立たない。

「譲、明日は大丈夫なんだよね？」

そう訊ねたとたん、少し緊張が戻った。

『ああ、問題ない。急ぎの仕事は入ってないから』

「そう……よかった。譲……」

『どうした？』

「うん。わたしのこと、嫌になつてない？」

『なんでそんなこと訊くんだ？』

「なんとなく」

譲の声は硬く、怪訝そうで、わたしは声のトーンを上げて笑った。
『情性で人に付き合うほど暇じゃないんだけどな』

「仕事に熱心じゃないって云ったくせに、何が忙しいのか気になる
ところだけど」

突っこんでみると、譲の低い笑い声が電話越しに届いて耳がくすぐつたい。

『とにかく明日は大丈夫だ』

「うん、じゃあね」

電話を切ると、何も考えられないくらいドキドキした。
バカなことやってる。

わかつているけれど止められない。二十八にもなつて、今年は年
度も変わって二十代最後の年なのに何やってるんだろう。大人には
程遠い。いつまでたっても、あの頃の自分を認められない。

*

ずっとずっとまえ——あまり数えたくはないけれど、十三年もま
え、わたしはそれとわからずに、たぶん、な本気の恋をした。

都会でも田舎でもない地元で、それなりに中堅の高校に入学して
からまもなくのことだ。友だちと一緒に、校内のいろんな場所を探
検じみて回っているときに見かけた。それから見ているわけでも探
しているわけでもないのに、その姿が目に入ってくる。

上戸匠。

一つ上の先輩で、顔見知りになつた先輩に何気なく訊いたら、す
ぐに名前が出てきた。県内でも名の通つた上戸病院の息子だという。
そのせいなのか、いかにも高貴な異質さがあつて、簡単には近づけ
ない感じがした。

匠は男八人女四人というグループで行動していて、その隣にはいつも決まった彼女がいる。ただの彼女ではなくて、きっと“カノジヨ”だと思った。

わたしはわたしで付き合っているカレがいた。

付き合おうぜ？

そんなお決まりのセリフは中学二年の頃から何度となく聞いて、そのたびに嫌にも思わなくて応じた。そのほとんどは、なんとなくながらも、いいなあと思っている人で、以心伝心かも、と単純にうれしくなる。

学校の廊下ではしゃいだり、帰り道を一緒に歩いたり、休みの日に会うようになって。それからカレの部屋で……というお決まりのコース。

男と女の“やること”については、知識としては知っていても、最初はびっくりした。迷った。怖かった。不安だった。

好きならこういう気持ちってあたりまえだろ。

はじめて付き合った人、一つ上の先輩の言葉に、そうなんだと納得してわたしは安心した。

好きという気持ちが先輩の中で壊れたときはショックだったけれど、そのうち、わたしはまた、いいなあと思う人ができた。その人から好きだと打ち明けられて、成り行きを踏んでまた壊れる。

好きってそんなものなんだ、と思った。多少、さみしいと感じないわけでもなかったけれど。

匠のことは気になってもカノジヨがいるならだめだろうとあきらめて、ただ、その気持ちは消えなくて、いいなあと思う次の人が現れなかった。そういうなかでも変わらず告白はあって、その都度、付き合ってみた。

いまになつて思うと、この頃のわたしの中には意思というものが存在していない。いちばん大事なことを“なんとなく”任せですませていた。

美里は美人だからね。

そんな友だちの誉め言葉を鵜呑みにした。両親でさえ、小さい頃から“可愛い娘”とあからさまに自慢してたから。付き合ってたという告白が多いのはそのせいだと思っていたのに、そのうち、カルい女だと噂されていることがわかった。傷つくよりは、つまらない人のやつかみだと思った。

どうかしてる。

わたしは鏡に映る自分を見つめてため息をついた。

やつかんだ人ではなくて、わたしのほうが丸っきりの馬鹿で、ただ恥ずかしい。

気づかせてくれたのは匠だ。

*

二年生に進級すると、匠の傍にいたのは、匠のお兄さんのカノジヨだとわかって、わたしは告白に走った。

匠たちは体育館の入口にある階段のところにいつも屯している。

校舎から体育館に通じる、渡り廊下へと曲がる寸前で匠を捕まえた。

「上戸さん、好きなんだけど、わたしと付き合ってくれない？」

先輩ということを見殺した不躰な告白をどう思ったのか、匠は興味ないと云わんばかりで背を向けた。

「上戸さん！」

「そんな気ない」

振り向いた匠は、一言でわたしの告白を退けた。

自分から誘ったこともはじめてであれば、もちろん断られたものもはじめてで、わたしは戸惑った。そのすえ、断られても撥ね退けられても付き纏った。

わたしの噂は匠の友だちが聞きつけたようで、いつか、立ち去る間もなく背後から告げ口が耳に入った。

「噂、だろ」

匠が友だちに返した一言はうれしくもあり、そして、モヤモヤし

たものをわたしの中に生んだ。

それが何かはつきりしないまま、その一言に頼って押しかけていたら、いつの間にか追い払う言葉はなくなって、話しかけてくることはなくても仲間内のなかで一緒にいられるようになった。

「匠、明日、一緒にグリーンランド行きたいんだけど？」

告白から二カ月が過ぎた七月に入ってすぐ、匠を隣町の遊園地に誘ってみた。匠は受験生だし、夏休みまえになんとかしないと、長い時間、会えなくなってふりだしに戻りそうな気がする。

そしていま、わたしはずうずうしくも、『匠』と呼び捨てるようになった。当の匠は咎めるでもなく聞き流しているようだ。

「お母さんが会社から入場券もらって、それをくれたの。ゲートの前に十時。待ってるから！」

考えこむように黙った匠を覗きこみ、断られるまえに急いで時間を指定すると、返事を聞かないでわたしは教室へと駆けた。

待ちぼうけのすえ、すっぱかされるということも覚悟していたのに、わたしが着いたのとほぼ同時に匠はやって来た。

「匠、ありがと！」

「何乗るんだ？」

お礼は無視されて、ぶっきらぼうな質問が返ってくる。

「匠はどういうのが好き？ 男のほうがジェットコースター苦手って人、多いけど、匠もそういうの怖い？」

「大抵のは怖いとかない」

「大抵？」

「乗ったことないのもあるからな」

的確すぎる返事にわたしは笑ってしまう。

「あ、なあんだ、そういうこと！ じゃ、匠が乗ったことないのに乗りたい」

匠はいかにも無理強いされているというため息を吐いたけれど、わたしの気のすむまで初デートに付き合ってくれた。残念だったのは、どんな乗り物でもお化け屋敷でも、匠から動揺を引きだせなか

ったことだ。

それから休みが来るたびに誘ってみると、渋々ながらも付き合ってくれる。夏休みになると、頻繁にはなくても思いだしたように、匠から誘ってくるようになった。

「受験、大丈夫？」

「息抜き」

誘われるのも三回目になって、いちおう気遣ってみると、匠からは端的な返事が返ってきた。息抜きが友だちとわたしとでどれくらいの割合になっているのか気になるところだけれど、進展はしている感じた。

「どこ行く？」

「また考えてないの？」

いつもの問いかけにわたしはちよつと笑ってしまい、匠は首をすくめた。

「美里が好きそうなのがまだわかってない」

率直で簡単な答えにわたしは声を出して笑った。

それから誘われることを考えて、わたしは行きたいところのリストを作った。考えるだけで楽しくて、その楽しさはこれまでと全然違った。

でもなんだろう。どこかヘンだ。

告白した時季から季節が逆転した頃、わたしはそう思い始めた。

「おれさ、立花のこと好きなんだ」

十一月も終わりの昼休み、同級生の男の子に教室を出たところで呼び止められ、いきなり告白された。

匠と付き合っていることは、少なくとも二年と三年の間では周知の事実のはずだ。

「あ、でも、わたし」

「いいじゃん。今度の日曜日、空けいてな」

カレがいるのに、という状況下の告白はじめてのことで、断る間もなく、ただ困惑して、廊下を走っていく男の子を見送った。

告白を受けた瞬間に感じたこの不安はなんだろう。

「匠、いまね、同級生の子に告白されたんだよ」

なんとはなしに報告してみると、匠は首を少し傾けたくらいで無反応だ。

その瞬間に気づいた。

不安は、匠から好きと云われたことがないこと。匠がそういうことを云う人とは思わないけれど、云わなくても……。どこかヘンに感じていたのは、男と女の“やること”まで進まないこと。それどころか、手を握ることもなくて。

匠はわたしのこと、好きじゃないの？

最近受験間近で、匠からの誘いはなくなつて、わたしも誘えなくなつた。学校で会うことしかできない。遠く離れた東京の大学を目指しているのに、匠からはなんの約束の言葉もない。

そんな不安が重なつて、試してみたい気持ちが湧いた。

わたしが別の人といたら、怒つたりして何か反応が見られるかもけれど迷いはあつて、いざ同級生の子と待ち合わせた場所の近くまで行くとためらつた。

「立花、こつち」

Uターンしようとした矢先、声をかけられた。モヤモヤした気持ち広がる。

でも会つてしまつたら、ここで帰つても帰らなくても一緒だし、遊ぶだけだし、女の子でも男の子でも一緒。匠から確かなものが引きだせたら、“なんとなく”ということもなくなつて、こんなこともちゃんと断れるようになりそう。

考えを切り替えてしまうと、わたしのためらいは消えてしまった。匠とは来たことのないアミューズメント館で、女の子同士ではないゲームをしたりして、男の子と単純に楽しめた。

次の日、驚いたのは、学校へ行くなり、上戸先輩とは別れちゃつたの?! と、寄つてたかつて同級生たちに問い詰められたことだ。見られたのか、それとも男の子が喋つたのかはわからない。ただ、

男の子と会っていたことが知られている。

違うよ、ちよつと遊んだだけ、と否定したら、女の子たちから奇妙な目で見られた。あらためて匠が憧れの的であることに気づき、噂が触れ回されていることを知って後悔したかもしれない。

匠に話す手間は省けたんだから。わたしは楽観的に思うことにした。

「匠！」

いつもの場所に友だちと固まっていた匠を見つけて、叫ぶように名を呼んだ。わたしを振り向くと、めずらしく匠から近寄ってきた。その表情は普段からあまり変化することはないけれど、それでもこれまでと違う何かを感じた。

匠はやっぱり知っている。直感的にわかった。でも、怒っているのも、哀しんでいるでもない。

何？

「おまえの“好き”ってなんだ？」

声にも怒りは見えなくて、ただ淡々としていた。わたしはただ戸惑う。

だって、好きは好きってことで、何って訊かれてもそれ以上に答えられることなんてない。

じゃあ、匠の好きって何？ 好きだから付き合ってるんでしょ？ それなのに好きとも云わなくて、“やること”もやらないのは匠のほうだ。

「女と付き合うのははじめてだし、おれなりにやってたつもりだった。けど、おれは向いてない。美里、もう来るな。終わりだ」

匠が何を云ったのか理解できるまえにわたしは見捨てられた。

あとから思えば、匠は呆れただけで、そう仕向けてしまったのはわたし自身にほかならない。

好きがダメになって、こんなにさみしくて、悲しくなったことはない。

だって、好きなんだから！

そう叫びたいくらいの、本当の“好き”がやっとわかった気がした。

わかつたら、今度はいままで“なんとなく”やってきたことを直視できないくらい後悔して、匠にはもう近づけなかった。たまに感じていたモヤモヤはこの後悔という気持ちに似ている。

そして、流れた噂は二重の打撃だった。“やること”をやっているという尾ひれまでついて收拾がつかない。そんななか、お節介な友だちがこっそり教えてくれた。匠のことをやっかんていた子が、男の子を喉けたらしいこと。

匠が女の子の間で人気があるというのは公然だったけれど、あんな雰囲気では告白したくてもできない。それをできたわたしには、必然的に風当たりが強かった。だから、そういう子がいてもおかしくない。

けれど。そもそも悪いのは、安易に男の子と遊んでしまったわたしだ。匠と付き合う以前のわたしは尾ひれも何も、そのとおりで。わたしが苦しかったのは、匠が敗者呼ばわりされたこと。わたしが弁解しても、それはだれにとっても薄っぺらにしか聞こえない。

わたしはずっと考えている。いままでのこと。

おれなりに。

そのとおり、匠は匠なりにわたしのことを考えていた。

好きだったのはわたしで、匠はわたしの“付き合っ”てに付き合うことから始めたわけで、好きはあとからついてくるものだったのだ。

美里の好きそうなのがまだわかっていない——まだ、ということのはわかるうとしていたということ。それはきっと、追い払わなくなつたときから始まっていて、少しずつ少しずつ匠は応えていた。

わたしにとって匠がいままでと違ったのは、そういう、だれにもなかった実直さがあるからだ。

ヘンに感じていたことも、触れることのない物足りなさなんかじやなくて、わたしのただの欲張り。好き、を疑うよりも匠の気持ち

を待っていればよかったのに。

卒業していく匠の背中を見送りながら、わたしは漠然と誓った。
匠にたどり着けるように頑張るから。だからそのときは――。

匠を追って、同じ大学ではないけれど東京の大学に進学し、そして、匠がいる業平商事への就職までたどり着いた。

こっちでは遊ぶのをそっちのけにして、思いついたかぎりいろいろなことを学んできたつもりだ。国内だけではなく世界に名立たるトップ商社へ入社できたという結果は、わたしの自信になった。新入社員の一カ月研修でも、なんとかついていけそうな手応えをつかんだ。そこが機能しなければ経営は成り立たないという営業部に配属されたのは、手応えの裏づけになって、頑張ってきた自分を誉めたいくらいだ。

匠のことは地元にいる子の伝手で大まかにつかんでいて、会いにいくこうと思えば行けた。けれど、会ってしまえば際限がなくなることをわかっていたし、だからこそ、何も証明するものがなかったわたしは近づけなかった。

でも、いまなら匠もきつと認めてくれる。

配属先に入った初日、新人紹介で営業部フロアの各ブースを案内されて、その中の一つに匠はいた。新人を見回す視線がわたしを見た瞬間に止まった、というのは気のせいなのか、すぐに隣に流れた。なんの反応もない。まるで覚えてもいないように。忘れてほしいことはあるけれど。

わたしのことは思い出にすらなつてなくて、どうでもいい記憶でしかないの？

内心、泣きそうな気分で呆然として、けれどいまは工作中で、自分の感情にかまっているときじゃないと云い聞かせた。何も考えていなかった頃とは違う。

実際、自分の持ち場に入れば、仕事のことで以外何も考えられないほど、新しいことにあたふたしてしまった。その間に、匠に対する気持ちはほぼ落ち着いていた。よくよく考えると仕事だったし、個人

的な話ができるわけもない。

規定勤務時間の五時半までであつという間で、それから新人はキリのいいところまでで帰らされた。一階まで下りるとそれまでの緊張が解けて、ため息をつくなり肩の力が抜けた。

ほかの新人たちとは業平本社のビルで別れ、わたしは独り、受付カウンターの反対側にある待合ブースに入った。それから二時間、七時半を過ぎてようやく匠が下りてきた。

「匠」

匠が独りでよかつたと思いながら呼び止めた。わたしが近づく間、とりあえずは匠が待っていてくれることにほつとする。

正面で立ち止まると、まっすぐな眼差しが向く。わたしの心臓の音まで覗かれているんじゃないかという、バカげたことを考えてますます鼓動が乱れた。

あらためて目の前にすると、押してもビクともしないような、明らかに“少年”を脱した匠がいる。変わらず孤高として見えて、その雰囲気は高校の頃よりもっと厚みを増した感じがする。

「わたしのこと、わかる？」

わからないと云われてもいいように用意していたはずの言葉は、匠の名を口にした瞬間からすでに真っ白になってしまっている。わたしはおどけた笑みを浮かべて焦りを取り繕った。

「こつち来てるって知らなかった」

肩をすくめながら答えた匠の声にドキドキして、そして何より安心した。匠はわたしを忘れていない。

「大学からこつちいるんだよ」

匠はうなずいただけで、それ以上は質問も何も返ってこない。

「いまから営業ってわけじゃないよね？」

「違う」

場を持たせるためにからかったのがなんにもならないくらい、匠は素っ気なく否定し、わたしを思案げに見下ろした。

「……予定ないなら、一緒に食べるにいつでもいい。どうする？」

「うん、行く！」

不自然なほど間を空けた誘いにためらいなく二つ返事をする、匠はかすかに首をひねってわたしを促した。

匠は業平からそう遠くないレストランに連れていった。コース料理しか受け付けない高級な感じた。

どこ行く？ という問いかけがなかったことに、わたしは密かにがっかりしている。訊かれても答えられないけれど、わたしがむしやりに頑張ってきた間、匠にも何かしらの成長はあったはずで、近づけたんじゃないやなくて、もっと離れたという可能性もあると気づかされた。

「ここ、高くない？」

「おれからの就職祝いだ」

「ホント？」

「ああ」

「うれしい。ホント云うと、こっちでは友だちつくる暇なくって、だれかとはん食べるっていうのもあんまりなかったの。大学、頑張ってたんだよ」

「へえ。業平はどうだ？」

「実践は今日からだし、まだわからないよ。研修はいい感じだった」
「業平は開かれてるらしいから、認められる仕事ができれば上っていける」

「匠は上るつもり？」

「仕事やるからには当然だろ。だから業平を目指してきた」

匠らしい答えだ。きっと堅実に地位を築いていくんだろう。

すましたコース料理に手間取りつつも、会社のことを中心に話していくうちに、匠がずっと話上手になっていると気づいた。最初に呼び止めたときは変わらず無口そうだったのに、あれは単に何かをためらっていただけなんだろうか。高校のときは、話しかけるたびに一呼吸置いてからしか返ってこなかったのが、いまは殊の外スムーズに反応がある。

匠を変化させたのは何？　ただ単に大人になっただけ？

「匠、もしかしてカノジヨいる？」

わたしはつい訊いてしまった。たったいままで、こんな単純な可能性を考えてこなかったなんてどうかしている。

「あ、もしかしてっていうのはおかしいよね」

露骨すぎた気がして慌てて付け加えたけれど、混乱したのはつかの間で、わたしは別のことに驚いた。

だってその答えなら、すぐに返ってきていいはずの返事なのに、ためらったのちに出てきたからだ。そのうえ、一瞬だったけれど、いつもまつすぐな匠の視線が浮いた。

「いない」

なんだろう。

だめなんだ。

漠然と感じたことは、それからだんだん明確になっていった。

相談があるの。

大したこともない相談をわざわざつくって会ってみるけれど、匠が応じるのはそこまでで、中に入りこめない。

もしかしたら『いない』と云ったのは嘘で、カノジヨがいるのかもしれない。営業部のお酒の席で、匠の同僚に話のついでみたいに訊いてみた。

ちよつと酔っぱらってテンション高めだったその人は、業平に入社して以来、匠にはカノジヨがないことを教えてくれた。大学も一緒だったらしく、そのときはいまと比べると想像できないくらい匠の女遊びが派手だったという。

わたしからすれば、女遊びが派手というほうが想像できなくて、親切なのかお節介なのか、その人が匠のことを語る間、別人の話を聞いている感覚でいた。

わたしにはそんなことはどうでもよくて。それよりも特定のカノジヨがいるわけでもないのに。

ともすれば、拒絶されている、とさえ感じるのはどうして？

疑問を持つこと自体、わたしが受け入れられないという答えにもなっている。

認めたくない。

仕事はうまく熟していて、匠もそれを認めている。でも、そうじゃない。

わたしは好きだつて叫ばせてほしいんだと気づいた。

それなのに、匠にある壁と、匠が云った、おまえの好きってなんだ、という言葉がそうさせてくれない。たどり着けない。そこから進めない。

わたしは頑張ってきたのに。

あのときのこと、わたしはずっと引きずっていかなくちゃならないの？

自信が散り散りになりそうで、やっぱり自分を否定したくなくて、縋れるものが必要になった。

あの頃からずっと変わらないことがある。付き合おうぜ、が、付き合いませんか、という云い方に変わりはした。それに、さすがに大人になると用心深くなるようで回数は減った。もしくはわたしの力が衰えてきたのか。むしろ、そのほうがうれしいかもしれない。そのたびに、誘いやすい軽さがあるんだろうかと落ちこんできたから。

けれど、落ちこむことじゃなくて、わたしにも惹く何かがある。匠が見いだせなかったものを、その人が見つけてくれるのならそれでいい。そう思い始めた。

でもだめだった。

付き合っても先に進めない。あれからずっと男の人を避けてきたせいか、触れられるのが怖くなっていった。一歩踏みこもうとされると、つい避けてしまう。上手に断れる方法も思いつかず、得てして露骨に見えるようで、すぐにぎくしゃくしてうまくいかなかった。そうなるとうしろようもなくなつて、わたしは匠を呼んだ。

匠というわたしを見てどうするのか。保証が欲しかったのかもし

れない。

匠を超えられる人なら、恐れずにぶつかっていける気がして。あわよくば、わたしを見てくれている人がいるんだよ、と、匠への証明にもなる。

結局は鉢合わせという下劣なことを繰り返しても、保証も得られなければ証明にもならなかった。匠を目にしたとたん、だれもが踵を返す。

最初の二人のときは気づかなかったけれど、三人目、わたしの視線に気づいた匠はそれを追った。頭の切れる匠が、どうということか見当をつけられないはずがない。

ますます匠をうんざりさせた。わたしもうんざりしてる。それでも相談だと云うと、匠は見限ることなく付き合ってくれる。どうして？

そんな疑問を抱えて無駄ともいえる時間だけが過ぎていく。それに決着をつけられたのは、再び会ってから五年がたち、匠が栄進をかけて中国への異動を決めてからだった。

中国支社の規模拡大というプレッシャーを背負い、成功すれば昇進が待っているけれど、逆に、頓挫すれば不名誉が残るだけ。そこにあえて手を挙げるという、匠は本当に怖いもの知らずだ。

同時に考えついた。わたしは普通で、匠のほうがおかしいということ。

いまでも、派手だったという大学時代も、特定のカノジョがいたことがないというのは人を好きになっただことがないということ、そんなのは絶対におかしい。感情が欠けている。

匠が中国に立ったあと、気づいたこともある。

自分を否定したくないために頑張ってきたけれど、それをまったく無意味にするほど、わたしがしていたことは、匠にとって自分のときと同じことをやっているように見えただろう。

匠が春に中国へ行つて半年、付き合う人もいなくて、出かけるといえば会社の女性たちがほとんどだ。

今日は、今年度入社してきた後輩の子からお洒落な店を教えてほしいと頼まれて、このダイニングバーに連れてきた。

ここは鉢合わせに使っていた店で、わたしにとつてはあまり好きな場所ではないけれど、そう店を知っているわけでもない。ただ、後輩に対して、見かけ倒しと思われなくなかったという、まったくもって unnecessary プライドによって来てしまった。後輩が無性に喜んでくれたのが救いだ。

「立花さん、お化粧室はどこですか」

「カウンターの奥。ここ、お化粧室もお洒落だから」

「うわあ。じゃ、いつてきます！」

後輩は張りきつてカウンターのほうへと向かった。業平への入社を機に、広島から上京してきた彼女はいちいち反応が無邪気だ。わたしはうらやましさ半分、独り笑った。

「いま独り？」

ワインを一口飲んで、グラスをテーブルに置いたと同時に、すぐ頭上から低い声がした。

顔を上向けると、三十代半ばだろうか、顔立ちは整ってすっきりしていながら、どこか不屈な精神力を感じさせる男の人がわたしを見下している。声のかけ方がナンパ的で、けれど、ナンパする人とは思えないくらい上品な印象を受けて、その落差にちょっと戸惑った。

「え……二人ですよ。いまお化粧室に行ってるんですけど」

「いや、そういう意味じゃなくて。カレとかご主人とか」

なんとなく滑稽な様子で、尚且つ率直な言葉は、わたしを自然と笑わせた。

ただ、初対面で声をかけられることははじめてで、そのうえ、見かけと違って気取ったところがなく、戸惑いの度合いが増した。そ

れをごまかすためになんとか切り返そうと試みる。

「そう云う……えっと？」

「田辺譲、三十三才」

「わたしは立花美里、二十八才。そう云う田辺さんのほうが『独り』じゃおかしい気がしますけど」

「あー、選り好みしてるってよく云われる。けど、選るまえに好む人に巡り合っていないことのほうがおれにとっては問題だ」

おどけた返事が返ってきて、思わず声に出して笑った。

匠のことが整理ついてから、余程のことがないかぎり男の人には近づかない——違う、近づけないと思っていたのに、立たせたままなのは悪い気になって空いた席を勧めた。

「田辺さん、どうぞ」

「連れがいるようだし、邪魔しちゃ悪い。けど今度……」

田辺さんの場を弁えた礼儀正しさは——こういうナンパでこの言葉がふさわしいのかは疑問だけれど、とにかく押しつけがましくない。胸ポケットから名刺入れを取り出した田辺さんは、同時にポケットに差したペンを手にして名刺の裏に何か書きだした。

「表は仕事用。信用できないなら会社に電話をくれてもかまわない。それで、教えてくれるかな」

さりげない催促はわたしをおもしろくさせて警戒心を奪い、気づいたときは携帯番号を口にしていた。

「ありがとう。電話させてもらうよ」

田辺さんはあっさりと立ち去り、入れ替わりに戻ってきた後輩の相手をしているうちに、いつの間にか店内からいなくなっていた。よくわからない人。

家に帰りついて、そうつぶやいたとたんの電話。

「田辺だ」

携帯電話を耳に当てたと同時に低い声が耳に響いてきた。

田辺さんのせつかちはまたわたしを笑わせる。

声は好きだ、と思った。

匠がいらないということ、譲がいるということ。その二つがちょうどよくて、気分的に落ち着いた気がする。

ただ、やっぱり譲が先に進もうとすると、わたしはためらってしまふ。

「階段、怖くないか」

ビルの屋上へと先に行く譲が、下からついてくるわたしに手を伸ばした。展望台に上る階段は下が丸見えで、わざと頼りない造りになっている。

「大丈夫。キヤアキヤア云って怖がるような年じゃないから」

わたしはさり気なく断った。けれど、ごまかしは役に立たなかったようで、薄明かりのなか、譲は顔をしかめたように見える。

「残念だな。カップルが遠慮なく手を繋げる場所を提供したつもりだけ」

譲は何かを思ったとしても、追求はせずに逆にからかった。

展望台まで上がると、色取り取りの光を散りばめた絶景が広がる。譲はこの商業ビルの建設に当たって設計案に関わったという。プレオープンは明日で、一足先にコンサルタントの特権でわたしを連れてきてくれた。

二月の終わり、春をまえにまだ風は冷たいけれど爽やかにも感じる。胸の高さまである手すりから少し顔を出して一望した。

「寒くないか」

「平気よ。それより譲、すごくきれい。うっとりしちゃう」

「だろう。ワインでもあったら最高つてとこだな。寒さも凌げるし」

「ほんと。そういうサービスは考えなかった？」

「手すりだけだし、酔っぱらって乗り越えて、拳句の果てに落ちてもらったら困る。ガラス越しじゃなくて、風を感じながらつてここが自然ぽくていいだろう？」

「そうね。ちよっと山登りした感覚はあるかも」

「山登り？ 美里を見てると想像つかないけど」

その言葉にふと考えた。わたしは手すりから手を放して、斜め後ろにいる譲を振り返った。

「わたしのこと、どんな想像してる？」

「想像してない。希望はあるけど」

譲は肩をすくめた。首をかしげて覗きこんでも、薄暗くて表情まではよく読み取れない。

「希望？」

「おれの部屋からもこういう景色は見られる。寒くないし、それに酔っ払っても落ちることはないよ。飛びこんでも弾き飛ばされるくらい頑丈な窓があるから」

その仄めかしがどういう意味なのか見当つけられないほど幼稚じやない。微妙に困惑した気配が広がる。

「高所恐怖症だからさ、ベランダにも出られなくて、窓の鍵は接着付けた」

しばらくして譲が付け加えると、わたしは困惑そっちのけで吹きだした。

「信じられない！」

「んー、大げさすぎたのは認める。けど、苦手だってことは確かだ」

どうしてだろう。

譲はいまままでの人と違う。

わたしが避けても無理強いしなくて、ぎくしゃくもしない。安心できて、それでいて怖さを感じている。この相反した気持ちは何？ 安心と怖さが不安をつくって、この半年のことが振りだしに—— 違う、それ以下になってしまいそうなほど、また揺れ始めた。

それは三月の半ばを過ぎて、匠が中国から帰ってきたせいもある。うつん、ただ帰ってきたからじゃなくて、わたしの結論を覆すようなことを聞かされたからに違いない。

譲のことを匠に報告したくて、そうすれば何が怖いのかわかるよ。うな気がしていた。

それなのに先手を打たれて、匠から結婚するという報告を聞かされた。

どうして？ 感情に欠けた匠が結婚？

結婚するカノジヨは、営業部本部長の娘という肩書きを持っていたも、これといって目立つような子じゃない。

ただ、きれい、ということとはわかった。

わたしが何よりも欲しくて、絶対に手に入らないもの。

それがなければ認められないの？

同じことをするわたしは浅はかで愚かしい。自分の気持ちさえ信じられなくて、自分がどうしたいかもわからなくて、やめられない。ダイニングバーは満杯で、大声で話したり笑ったりするような客はいないけれど、こもった話し声や笑い声がささめいて、五月という季節感そのままに終始和んでいる。

その中で、わたしだけがそわそわしている。

譲がやって来るまで、もう間もない。

「匠、結婚式までもうすぐね。忙しい？」

「ああ。マンションの引越しあるから」

「優歌ちゃんておとなしそうだけど問題ないみたいね」

ちょうど四年まえ、匠の結婚相手であり、部長の娘である優歌ちゃんは高校二年生で、業平に職場見学に来たことがある。そのとき、わたしも会っていたのだけれど、あまり印象に残らなくて、強いていえば、あからさまに臆した子だったことを覚えている。

匠に結婚を報告されるまで、まったく記憶から這いあがってくることもなかった。

そんな子が匠とうまくいくということが理解できない。うまくいっているとか、具体的に匠が口にすることはないけれど、なんとなくわかる。堅実さに余裕が加わった感じだ。それとも、中国から結果を携えて帰ってきたせいなのか。

「確かにおとなしいけど、ちょっと違うかもしれない」

その答えからしても匠が優歌ちゃんのことを見ていることがわかる。

いつから？ ふとそう思ったけれど、そんなことは関係ない。じ

やあ、何？

訳のわからない自問自答は、何も解決されないままわたしの中で迷走する。

「違う？」

そう問い返すと、匠は肩をすくめてすかした。

「匠、わたしも付き合って半年になる人がいるの」

匠は首をひねったあと、何を思ったのかうなずいた。

ひよっとして、ホッとした？

「よかったな」

匠の声は平坦すぎて、真意はやっぱりわからない。

「でも……」

怖い。そう云おうとしてやめた。匠に訊けばわかる気がしていたけれど、相手が匠だからこそ説明するには難しい。

そして、確かに怖くなった。

もうすぐ譲が来る。

壊そうとしている自分に気づいて、壊したくないという自分の本音に気づいた。

「でも、何？」

「匠、わたし、帰——」

「ここ、いいんだよな」

刺々しい声が割りこんだ。好きな声なのに、聞き慣れたイントネーションとは違う。

思い直したことは間に合わなかった。空気は息一つで弾けそうなほど張りつめる。自分だけ、違う場所に隔離されたように遠ざかった感触がした。

静止したような感覚はたぶん一瞬のことだ。匠から目を離せず、その匠は譲からわたしに視線を戻して、これまでになく険しい顔で首をひねり、それから席を立った。

同じことを繰り返した。

違うの！ そう叫んだとしても匠には軽薄にしか聞こえない。

団欒に沸く店内で、わたしと譲の間だけ、奇妙なくらい静まり返っている。

合わせ顔がないというのはこういうこと。匠の呆れきった視線

は受け止められても、わたしは譲を見られない。

知り合い？ と、そう訊かれればどれだけだつて云い訳できたのに、なぜ譲は黙っているの？ なぜ怒ってるの？

譲が残ったからといって保証にはならなかった。

ただ不安が増す。くちびるが震えていないことを祈りながら、笑うしかなくて。

「美里、おまえと結婚したい」

こんな状況下、理解しがたい言葉で、しかも譲は勘定票を持って席を立った。

聞き間違ひ？

出ていくんだ。それだけは理解できた。

いつものこと。ちよつと順番が違つただけで。

そう思う内心と裏腹に、わたしは立ちあがつた。

譲……。

だつて、謝れなかったこと、違つと云えなかったことを後悔したくない。譲とは――。

ダイニングバーを出ると、ずっとまえ見限られた日に立ち止まることのなかった匠とは違つて、譲はまだ店の脇にいた。

「譲」

名前を呼んだと同時に、気配を感じ取っていたかのように譲が振り向く。

「あの人は高校のときの一つ上の先輩で、いまは同じ会社にいるの。それで相談とかよく乗ってもらつてる。先輩は一年間、中国行つて三月に帰ってきたばかり」

云い訳に聞こえてもきつと云わないよりマシだ。云わないことのほうが苦しいことを知っている。

「それだけじゃないよな？」

譲は何を見抜いているんだろう。思いがけなくその先を促された。どこまで打ち明けたらいい？

「ホント云つと、高校のときに付き合つたことがあつて、でもふら

れちゃった」

迷ったすえ、大まかなことだけ云ってみた。笑っているわたしとは反対に、譲は表情を硬くした。

「だからなのか？」

「なんのこと？」

「近づこうとすると避けるから。手も握れないし……キスもできない」

譲が気づいていないとは少しも思わなかったものの、こんなふうにはつきり云われても、説明するにはためらうばかりでうまく伝えられる自信がない。きれいじゃない自分を知ったら譲は何を思うだろう。

「ちよつと……怖いかもしれない」

譲の顔の硬度が増して険しくなり、わたしは誤解させたと気づく。「あ、乱暴されたとかそういうことじゃないんだよ。そういうのは全然別の意味で、わたしが勝手に怖がってるだけ」

「だから、付き合いが深くなるまえに今日みたいなことやって男を切るのか？」

わたしはきつとびくり眼になっていると思う。譲の声は確信に満ちていて、わたしがやっていたことを明らかに知っている。

それなら、さっきはすべて知ったうえで、匠がいるというのにデビュールまでやって来たの？ だから、知り合いかと訊かなかったし、怒っていて。

でも、それからプロポーズなんて釣り合っていない。

わたしの頭は混乱しきった。

「……見てた？」

「おれがナンパしたのは、あの日に限って偶然一目惚れしたってわけじゃない」

その返事と出会った日のことをかみ合わせていく。わたしが愚かしいこと知ってたのに。それでも？

もう声をかけられたからって簡単には付き合わない。匠の中国行

きが決まってそう誓っていた。それをあっさり破らせた譲。もともと、誓うまでもなく、大学の頃のようにその気さえ起きることはなかったのに。

よくわからない人。

はじめて会った日、わたしはそう口にしてしまうほど、譲のことを考えていたのに違う。まるで見計らったように家に帰ったとたんの電話。それだけで譲は単純に笑わせてくれた。ナンパされたときも、そしていまも。

譲という人がよくわからないというのはいまでも同じだけど、わたしはいつのまにかかまえることなく笑っている。たまに見える強引さも、わたしの気持ちが追いついていないことを知ると、わざとふざけたことを云って気まずさを払う。

譲が譲であることに疑いはなくて、嫌いなところなんて何一つ見つけられない。

わたしは店の玄関先から譲へと近づいた。

「これまでの人と譲は全然違うの。でも譲もわたしのこと呆れちゃ

——」

「でも、から先はいらない」

即座にさえぎられ、わたしが首をかしげたとたん。

「来週は六月だし、結婚するにはちょうどいい。月曜日は遅刻だ」
せつかちな譲に、わたしはまた笑った。

返事のかわりにわたしは譲に向かって手を伸ばす。それがいちばんの答えになっていると思った。

譲の手が強くわたしの手を捕えた。ビクビクした、もしくはドキドキしたわたしを穏やかにしたのは、譲の笑った顔だった。それはまるで譲を少年のように見せる。

理不尽なわがママがわたしの中に現れた。

だれにも見せないで。

*

結婚してから十カ月。四月に入って、ちょっと肌寒い日もあるけれど、概ねすごしやすく、シフォンのミニ丈ワンピースという身軽さは心地いい。にもかかわらず、わたしは気分がすぐれない。

「美里、体調はどうだ？」

カーディガンを羽織っていると、会社からいったん家に帰った讓が寝室に入ってきた。

「平気」

ぶっきらぼうな声と一緒に、きつと仏頂面になっていると思う。

今年は三十になるうとするのに大人げない。わたしの都合で、讓に非はない。

「無理しなくていい」

今日は讓の会社で新人の歓迎会があつて、わたしも呼ばれているけれど、このところ調子が良くない。別に病氣というわけではなく、人に云わせれば“おめでた”で、こんな不機嫌になることじゃなくてうれしいこと。それなのに、わたしは喜べていない。単なる悪阻のせいじゃないことはわかりすぎている。

ただ不安で怖い。いつまでたつてもわたしのやることは向う見ずな子供みたいで、大人になれなくて。

わたしがいま大事にしたいもの。それまでも裏切ってしまった。

「うつん、無理じゃない。悪阻はだれでもあることだし」

「おれがもうちょっと配慮すべきだったと思ってる」

「え？」

なんのことかわからずに、わたしはきょとんとして一語で問い返した。

「妊娠。気をつけるべきだった。おれはそうならいって思ってたけど、産むのも、いろいろ負担になるのも美里のほうだし、どうしたいのか訊いておけばよかったと後悔してる」

どうして讓はこんなふうに大人でいられるんだろう。ますます後ろめたくなる。

「譲は満点の旦那さまね。だから譲が謝ることじゃないの。謝るのはわたしのほう」

「気分悪いのは当然だし、おれの前では無理していいフリしないでいいんだ。美里が謝る必要はないだろう」

譲は謝罪の意味を勘違いしている。無論、勘違いしてもらわなければ困るのはわたし自身であり、訂正する勇気もない。顔をうつむけて目を逸らした。

「正直に云えば、美里を抱くのが気に入ってる。気分は高校生かもしれない」

ちよつとした沈黙のあと、譲が口を開いた。その表現が可笑しくて、わたしは顔を上げた。生真面目な声のわりにそこにはニヤついた顔がある。譲はやっぱりわたしを笑わせる。

「“気に入ってる”？」

「弁解にもならないな。それだけ余裕でいるわけじゃないってこと、覚えていてくれ」

それは何かを含んでいそうに聞こえた。それとも考えすぎで、単純に受け取ってればいいんだろうか。

「どうする。行く？」

「うん、行く。譲の顔を潰したくないから」

ホントはとつくに潰している。

このままなかったことにすれば、わたしは良心まで泥溝に捨てることになるのだ。

「妊婦に冷たかったら、コンサルタントっていう職種上、おれの顔が潰れるまえに、流行遅れの男尊女卑で会社自体がとくに潰れてる」

譲はわたしをラクな気持ちにさせる術を知っている。知っているというよりは無意識で、あるいは譲の持ち前の性格で、わたしがわがままにラクになっているにすぎない。

本社のみで開かれた歓迎会は三十人を超える大人数で、譲の会社近くにある居酒屋の半分を占領して始まった。

業平商事も大会社なわりに、だれかを牽制するような陰湿さはなくフレンドリーだけれど、譲の会社も和気あいあいとしている。

たぶん、年の離れたパートナー同士が親子みたいになっているせいだろう。名目上は社長と副社長ということになっているけれど、権限は同等にあつて、ベテランの知恵と若手の斬新な目線がうまくかみ合つて、経営も上々のようだ。この不況下、来期は、関東の枠を出て地方にも進出するらしい。

譲のテリトリーであるこの場所には何度か顔を出しているけれど、譲の、嫌味のない人付き合いのうまさはここでも活きていると思う。「譲くんは私に似て仕事にしか興味ないと信じてたんだがね」

「社長、似てるのはそこじゃなくて、きれいな人に弱いところですよ」

中堅社員が遠慮もなく、トップ上司を揶揄する。

「ほんと、美里さんていつ見てもきれい。お化粧品もそんなに濃くないですよ」

「それ、云い方が失礼だろ」

内勤の女の子が云つたことに嫌な印象は受けなかったけれど、隣に座つた若い社員が咎めた。

「あ、大丈夫よ。充分に誉め言葉になつてるから。ありがとう」

「んー、やっぱり譲くんが惚れるだけあつて品がある」

「それにあの業平商事に勤めてるって才女なんですよ」

「そんなことないの。わたしはいつも必死になつてないとすぐに置いていかれる程度」

だんだん息苦しくなってくる。表面上は、きれいだとか、業平に勤めているゆえに、できる女だとか思われる。でも中身は、そういつた見かけ材料に釣り合っていない。

「副社長、それに美男美女で、つて出来すぎじゃないですか」

正したことは置いてけぼりにされてしまい、それとはわからないくらい、わたしはそつとため息を吐いた。

「どうやって知り合つたのか興味あるんですけど」

「おれがナンパしたに決まってるだろう」

譲は隠しもせず、すまして即答した。

「わあ。美里さん、きれいだし、カレシとか旦那さまがいるかもしれないのに。自信ありました？」

「自信なんてないよ。だめでも当たって砕けなきゃ、結局はどうでもいいものばかりになって、本当に必要なものは何も手に入らない」

そう云いながら、譲の目は質問した女の子ではなく、なぜかわたしを向いた。

もしかして知ってる？

違う、そんなはずない。でも……何か感づいている。

泣きたくなった。

でも、泣くまえにわたしは認めなくちゃならない。いったんは潔くあきらめなくちゃならない。そうしないと、本当に否定しかできなくなる。

いつもまっすぐにわたしを見る譲に気づいてそう思った。

わたしはあれ以来、いつも首をかしげて機嫌を窺っていた気がする。匠にも、そして、譲にも。

まっすぐに見られないのは怖いから。

きれい。そう云われるたびにつらいのは、自分がきれいじゃないことを知っているから。

一カ月前、わたしはやっちゃいけないことをやった。

妊娠がはつきりするまえのことで、でもそれを情緒不安定の理由にするには生まれてくる子に対して卑劣すぎる。

それ以前もわたしは意地悪だったから。

匠って退屈じゃない？

匠と優歌ちゃんがわたしたちと同じ六月に結婚して——もちろん先に決まっていたのは匠たちであり、わたしと譲の入籍は周りを驚かせるくらいとつただけだったが、その半年後、レストランでばったり会ったときに云ってしまった。

わたしのはどれだけ頑張っても認めなかったくせに、匠は優歌ちゃんをすんなりと受け入れた。それはふたりを見ていればわかる。なんの蟠りもなく、まっすぐに匠を見ている優歌ちゃんをうらやましいと思った。

譲と結婚して幸せじゃないなんてことはない。そう云ったらきつと天罰ものだ。それよりはむしろ、幸せと感ずることが、わたしにとっては天罰のように感じ始めた。

それに伴って、いつ壊れるのかと不安で不安でどうしようもなくなった。意地悪できれいじゃなくて。

譲ももし優歌ちゃんみたいな子と会ったら、わたしがきれいじゃないことを知ったら、匠みたいに背中を向けるんだらうか。

そう思いたくなくて、理由が欲しくなった。

仕事のことで相談があるの。そう云って、レストランで会った日以来、はじめて呼びだした。

匠もまたいつもまっすぐで裏切ることをしない。その実直さを退屈と侮辱したにもかかわらず、なんの拘りもないかのように、仕事という口実だけで応じてくれた。

その拳句、わたしが云いだしたこと。

匠、お願いがあるの。一度でいいから。

そこから先の意味は自分の手に託した。その腕に手をかけたとたん、匠の目が嫌悪に満ちた。

匠はすぐに帰って、それでもやめられなくて、今度は電話した。

わたしはずっと匠を――。

そう、ずっと云えなかった一言を云いたくて。

場違いな発言は匠の舌打ちにさえぎられた。それから口を挟む間もなく匠が云ったこと。

『旦那はやり手のコンサルタントだって聞いている。でたらめな奴じゃないらしいし、なんの不足がある？　そういう奴に惚れられるんだ。おまえはもっと賢明にやっていける。おれはそう思ってきた。幻滅させないでくれ』

そのときになつてはじめてわたしは知った。

相談を口実にした誘いをずっと断っていた匠が、どうしてあの日、わたしの呼びだしに応じたのかも。

譲のことをどこから聞いたのか、匠はそれできっと安心していった。都合よく考えれば、ずっとわたしのことを気にかけていたのかもしれない。

匠が昔のわたしの愚かさには少しも拘っていなかったこと、わたしが頑張ってきたことを認めていること。それは、何度わたしが愚かなことをやろうと、匠がずっと付き合ってきてくれたことで証明されていた。

わたしはいままで何を拘ってきたんだろう。

――おれにはいま大事にしたいものがある。美里、おまえがいま本当に大事にしたいのはなんだ？

そう訊かれて、わたしはわたしを嫌悪した。

ずっと匠を。

それ以上、わたしに喋らせないように匠がさえぎってくれたことは最悪の中の唯一の救いかもしれない。

匠の口から結婚という言葉聞いても、理由が欲しいと願っただけで、優歌ちゃんから奪おうとか、嫉妬を感じたわけじゃなかった。そのことが、匠への気持ちがわたしの中ではとくに整理できていたことを示しているのに。

いいかげんにやっていた頃の自分を否定したくなくて、匠に認められたいというよりは、ただ認めさせたかった。

その呪縛はいつまでたっても解けなくて、譲に打ち明けられないでいる自分のずるさも嫌になって、呆れられてしまうことが怖くなって、その果てにどうでもいいと自暴自棄になってバカなことをした。あの店で、壊したくないと思い直したことはなんにもなっていないかった。

譲は譲であり、不審なんて似合わない人。

そう知っているのに、わたしは譲までも侮辱している。

「譲、ちょっと歩きたい」

歓迎会からの帰り道、タクシーの窓から見えるマンションはだんだんと視野を占めていく。

このモヤモヤを抱えたままで、いつまでも平気ではいられない。このまま家に帰りたくない。ふたりの住処を穢している気がした。「わかった」

譲はすぐに応じてタクシーの運転手に指示をした。タクシーはマンションまで続いている歩道脇で止まり、わたしは先に降りた。

風が通り抜けて、ワンピースがふわりと浮いたけれど寒くはない。高くそびえるマンションは、まもなく十時というのにまだどこもカーテンは開けっ放しのようで、部屋の灯りが数えきれないほど溢れている。

この場所は、近くに高さを競合するビルがなくて、見晴らしは申し分ない。

プロポーズされた日、このマンションに連れてこられて、譲が十五階という最上階で暮らしていると知ったのだけれど、本当に高いところが苦手なのかと疑いつつ、窓の鍵、動くよ、と指摘すると、すかさず、美里のためにリムーバーで剥がした、という、間に合わせの返事が返ってきた。

ふざけているのは明々白々で、怒る気になれないくらい笑ってしまった。

まるつきりあのビルでの言葉が嘘だったという証拠が取れたのはそのあと。

ベランダに出て夜景を眺めていると、背後から譲の手が伸びてきてわたしの手の外側でそれぞれ手すりをつかんだ。背中にぴったりとくっついた譲の躰は怖さに震えるでもなく、ただしっかりした鼓動を感じた。

それからのことは、高校生以来のことにもものすごく緊張して、あまり覚えていない。

強いていえば、ヴァージンでもないのに譲をきつく感じたこと、経験のない感覚にさらわれたことを覚えている。抱きしめられたまま眠る、なんていうのははじめてのことで、寝つくまでに時間がかったことも覚えている。

胸を包んだ手のひらに、わたしの鼓動が伝わっていたんだろう。大丈夫。眠って。

背後からのこもった声に安心してわたしは笑った。

何？

気持ちいいなって思っ

て。わたしが答えたら、今度は、光栄だ、と譲が笑った。

あんなに、とてつもなく、素直に幸せだと感じたことはない。

「寒くないか？ 気分悪くなった？」

「ううん。どっちも大丈夫」

「じゃ、行こう」

促すと同時に譲の手が伸びてきて、わたしはかすかに首を振った。
「先に行つて。ついてくから」

譲はほんのわずか、じつとわたしを見て、それから小さく肩をすくめ、マンシヨンのほうへと歩きだした。タクシーが脇を通りすぎる。譲の歩調はゆっくりとしていて、わたしは広い背中を追つていった。

話を切りだすのには勇氣と時間がかかる。何から云えばいいか思いつかないまま歩いているだけで、ともすれば立ち止まりそうになる。黙つたままでいるうちに、めずらしく譲も一言も口を開かないことに気づいて、わたしは足をふと止めた。

あとから来るヒールの音を気にしていたのか、譲もまた足を止めて振り向いた。それでも何も云わなくて、ただ譲はわたしを待っている。

「譲」

「何？」

「わたし……譲を裏切つてる」

つぶやくようなかぼそい声しか出ない。三步先にいる譲は、居酒屋で質問に答えながらわたしに向けたときと同じ眼差しで見つめてくる。

「どういうこと？」

「みんな、わたしのことをきれいだって云うけど、わたしはきれいじゃないの！」

半ば叫ぶように云うと、譲は目を細めた。それからちよつと目を逸らして、またわたしに戻ってきた。

「話したいこと、もしくは話すべきと思つてること、全部云えばいい。まずは聞くよ」

低い声は穏やかでかえつて云いづらくさせる。声の裏に潜んでいるのはなんだろう。

それがなんにしろ、ここで云わなかったら、不安は終わらなくて、平凡に笑える時間さえも始まらなくて。もしかしたら始まるのはぜ

口未満から。それでもまた、譲に向かえるのなら頑張れる。

——匠のこと。ふられたって云ったけど、正しく云えばわたしが裏切ったの。付き合ったのは匠がはじめてじゃなくて、中学の頃から告白されたら付き合うってこと繰り返してた。

最初の人と……やることやって……怖かったけど、好きならあたりまえだって云われてそうなんだって思って、だからそれから男と女が付き合えば普通のことだって思うようになったの。

でも匠は半年くらい一緒にいてもそういうこと全然なくて不思議だった。そういうときに別の子に告白されて、匠はわたしのことが好きじゃないのかなって疑問に思って不安になった。匠は好きとかそういうこと云わないし、告白されたって話しても反応しないし、じゃあ、わたしがほかの子とデートしたら何か云ってくれたりするのかなって思って。

そうしてみたら、匠は呆れちゃって、それで終わり。おまえの好きってなんだ、って匠に訊かれたの。そのときにはじめて気づいた。好きってというのは“気持ち”だってこと。

自分が汚いって思った。

それまでのこと全部が否定された気がして、それを取り戻そうとした。自分で云うことじゃないけど頑張ってきたつもり。とにかく匠に認めてもらいたかったし、やり直せたらって思った。業平まで追いかけたの。

でも、好きってこともやり直したいってことも云えなかった。云ってもダメだっていうのがわかったから。

それで惨めになって、認めてもらえるって場所が欲しくなった。だからまた告白されるたびに付き合うようになった。そのときしてたことは、譲が知ってるとおり。

匠は堅物で、好きな人がいたこともなくて、出世のために中国に行って。わたしにはあんなこと云ったくせに、匠自身が好きってい

うのがわからない人なんだって結論が出たの。

そういうとき、譲と会った。それで匠のことは乗りきれたんだって自分では思ってたのに、匠は中国から帰ってきたらいきなりで結婚するって。それで、また混乱したんだと思う。だって、好きがわからないのに結婚して理解できないし、相手が優歌ちゃん、優歌ちゃん、ききれいで、きれいなじゃないわたしだから、匠は受け入れてくれなかったのになって。

譲もいつか、って思った。それであの店で、譲にも同じこと……。結婚してもそういう不安は消えなくて。

半年まえに匠たちとレストランで会ったよね。あのとき、ふたりがすごく普通に幸せそうで、不安が一気にふくらんだ気がする。その不安を消したくて、匠に保証を求めた。匠が結婚した理由が、きれいということじゃなくて、優歌ちゃんに肩書きがあるからということなら納得できるから。

一カ月まえ、わたし……匠を誘ってしまったの――。

曖昧な云い方をしたけれど、譲はその意味を汲み取ってくれるだろう。

わたしはやっぱりするくて、そのあとの解釈は譲に任せた。息の詰まるような沈黙が満ちる。通る車のライトが譲の顔を照らし、見つめられていることに耐えられなくて顔をうつむけた。

「バカバカしい」

吐き捨てたと同時に譲は踵を返して歩いていく。その足音も怒っているように聞こえた。殴られなかったことが不思議なくらい、怒るのは当然のことだ。

でもまだ云っていないことがある。云いたいことを云えなかったことの後悔。そんなものはいらない。疚しさを曝すことで譲から軽蔑されることは仕方ないとあきらめたけれど、譲自身のことをあきらめたくない。

顔を上げると、いつものようにわたしの意思が見えているのか、十歩くらい離れた場所で譲の足が止まる。振り向いた譲の表情は、すぐ背後にある街灯のせいで影になってわからない。

「早く帰るべきだ。風邪ひいたらだめだろう」

譲。譲ってどうしてこんなふうに……わたしを認めてくれるの？

「譲！ 匠のことがずっと好きだった。でも、譲と会って、いまは譲が好き。“好き”じゃ足りないくらいずっと好きだから！ またいまから、譲に追いつけるように頑張らせてほしいの！ きつと、どこまでだって頑張れるから。それくらい好きだから！」

いまじゃなきゃ云えないこと。いまだから云っておくべきこと。

高校生みたいに幼稚な告白でも。

だれよりも譲に、何よりずっと伝えたかったことを本心から云えたいま、このまま世界が終わってもいいと思った。きつと目に見えるものがすべて消えても、この気持ちは続いていくと思えたから。

譲が漏らしたのは、呆れたため息なのか笑い声なのかわからない。立ち尽くしているうちに譲が戻ってくる。

「美里、おれに追いつくために頑張る必要はない。おれは、ついてきてないと思ったら戻ってくるから。もしも、美里が上戸さんとさつきほのめかしたような関係を持っていたとしても、おれは別れる気はない。逆に縛りつけることはあっても。たぶん、逃げたくなるのは美里のほうだ」

譲は誤解もしていなくて、ただ生真面目に身に余るような言葉を吐いた。きつとわたしは、これまでにないくらい驚いた顔をしている。

「譲……わたしにそんな価値ないよ」

「美里にどんな価値をつけるかはおれの勝手だ。プロポーズした日にマンションに連れてきて、美里がはじめてみたいにドキドキしてたのも、不安か、もしくは怖がっていたのもわかってる。おれがせ

つかちに進んで美里にちよつときつい思いさせたことも知ってる。おれにはそれで充分すぎるよ。あんまり云いたくないけど、美里が汚いっていうんなら、おれのほうがもっと汚い。付き合うこと以前に“やることやってた”から。つまり、美里が拘ってきたことは、さっき云った『バカバカしい』に尽きる。おれなら、それだけ美里は素直だつて解釈する」

「どうして……そんなふうに見えるの？」

「どうしてなんだろうな。ここ最近、美里が何かに拘っていたのはわかってたし、それ以前から抱えているものがあることもわかってた。終わりだとか云うんなら、とことん問い詰めてやるって思ってたけど」

譲は中途半端に言葉を切ると、口を歪めた。笑っているように見えて、けつして笑っているわけじゃない。むしろ逆に——苦しそうに見える。

「譲、誤解しないでほしいの。譲を信頼してないわけじゃなくて、わたしが自信なくて、勝手に不安になってただけ」

「当然だ。念のために云っておくと、怒ってないとは嘘でも云えないほど腹が立つてる。けど、それに目をつむらなくちゃならないほど、おれは美里に拘ってるんだろう。つまり、惚れた弱みってやつ。因みに、好きなら抱きたいってのはあたりまえだっておれも思う」

すました譲はやっぱりわたしを笑わせた。

「わたしもその意味、いまなら断言できる」

そう返したら譲は笑った。そしてつと目を逸らし、額にかかった髪をかき上げると、またわたしに視線を戻した。

「家に着くまでちよつと余裕を補給しないと。さっきの告白、効きすぎだ」

苦笑いした譲は直後、背中に回した腕で押しつぶしそうなほどにわたしの肩を引き寄せた。

「おれも云ってなかった。云ってたら不安にさせることもなかった

のかもな」

頭上でつぶやいたあと。

「美里、愛してる」

譲――。

告白されてうれしいことはあっても、泣くことがあるとは思わなかった。

はじめての恋には戸惑って迷って終わりが来ても。

譲には終わりのない、ラストラヴ続いていく恋を捧げたい。

わたしからの、最後の恋、を。

k s - The Conclusion . - Many than
f o r r e a d i n g .

大人の純情 最後の恋 - 4 - (後書き)

あとがき

最後の恋、英語にするなら『Last Love』

『Last』は「最後」という意味のみならず、「続く」という意味もあり、そこから、最後とはつまり、終わらないということ。そんな解釈のもと、最後の恋ができたらという憧憬を込めて。

この主人公たちは、知る人ぞ知るふたり。

あのふたりの裏ではこんなふたりのラブストーリーもあつたわけだ…というところも楽しんでいただけたら幸に思います。

Junai Joule 拝

何度でも恋をする - 1 - (前書き)

教会のパイプオルガン。

一度弾いてみたくて忍びこんだ。

その夜に…

出会った人は届かない人だった――

OL×上司の何度でもフォーリンラブ！な初恋ストーリー――

何度でも恋をする - 1 -

教会で犯した罪。

天使にキスをした。

* * *

夕食のちよつとまえ、こつそり家を出ると、沈んでしまった太陽を追いかけるように、五〇メートル走よりちよつと長い距離を歩いた。雪がちらつくなか、自分の息が目のまえで白く変わる。そんな寒さも忘れるくらいに、緊張とわくわくした気分とごちゃまぜになつて、わたしの足は逸^はつた。

目指す教会はそびえるようというよりはひっそりとしていて、遠目から見ても古びている。クリスマスの一週間まえになると、不用心にも二十四時間、なかまで開放されている。

ステンドグラスがはめられた扉を開け、なかに入つてチャーチエアを見渡す。誰もいなくて、ささやかにうれしくなった。チャーチエアは、わたしみたいな子供だったら五人くらい座れるだろう。二列並んだその間の通路を迷いなく進んだ。

チャーチエアの後ろの部分にある聖書台の下には棚がついていて、本の――たぶん聖書なのだろうけれど、その上にペンケースなどの私物が載つて置きっぱなしにされている。それはまるで自分の家みたいで、何度か入ったことはあるけれど、教会と無縁のわたしにはやっぱり不思議な光景に映つた。

そんな教会で何よりわたしを誘惑するのはパイプオルガンだ。感情を込めて強弱をつけるピアノと違い、ただ音を張りあげる才

ルガンは、それでもうるさいとは感じることなく、体内に光が降り注ぐように心地よく沈みこんでくる。

いま、壁にかけられたランプの灯りが、オルガンケースの木、ホワイトオークを鈍く輝かせていた。わたしは生まれてからまだ十二年だけれど、ずっとずっと昔の温かさを教えてくれる。そんな輝きだ。

惹かれるように近づくと椅子に座った。そして、六段もある鍵盤のどこにしようかと思いつながら、そつと下から二段めの鍵盤に手を置いた。

足鍵盤はうまく届かないから無視をして、試しに指をおろしてみる——と、パイプオルガンは眠りから飛び起きたかのように大きく息づいた。わたしまで跳びあがる。

“ミ”の余韻は幻聴なのか、どうしよう、と怖々として息を潜めた。

後ろを振り返ってしばらく待つてみる。なんの音沙汰もない。

割れたステンドグラスは紙でふさがれているけれど、またそこも破れていて——もしかしたらわたしみたいな子供の悪戯かもしれない——そのすき間から冷たい風が舞いこんで、一緒に雪を連れてくる。それがランプに照らされて、まるで星が散るようだ。

神様、ちよつとだけ。

パイプオルガンに向き直って心のなかで慣れない祈りを捧げ、指はオルガンに息を吹きかける。

奏でるのはいま習っている“アメージンググレイス”。教会にぴつたりの賛美歌だ。

強弱の調整ができなくて一遍調子なうえ、少し支え^{つか}るという出来ながらも、わたしはうつとりしてしまう。

そして、フレーズを二回繰り返したそのとき。

パチ。パチ。パチ。

背後から弾くような音が三回、パイプオルガンみたいに派手で緩慢に響いた。

びくつと酷く肩が揺れて、その拍子に指が頓珍漢なキーを押してしまい、わたしは慌てて鍵盤から手を離してバンザイをした。

残響のなか、今度は別の音——ハア—ツクシヨ—ツ、という明らかにくしゃみが盛大に鳴る。

だれかいたつけ……！？

びつくりして転げそうになりながら椅子から飛びおりた。心臓をばくばくさせながらぱつと後ろを振り向く。

パイプオルガンを離れ、おそろおそろチャーチチエアが並列している間を進んだ。

一列め、二列め、三列め、そして四列め……に、いた！

お父さんが会社に着ていくような黒っぽいスーツ姿で、男の人が目を閉じて寝そべっていた。

寒くないんだろうか……じゃなくて、寒いからくしゃみが出たのかもしれない。コートはボタンが留められていなくて、だらしなくてはだけている。

知らない人には気をつけなさい。そんなお母さんの言葉を思いだしたけれど、怖いもの見たさという子供っぽい好奇心のほうが強い。何より、わたしのアメーzingグレイスに立派な拍手をくれたのだ。暖色の照明のなか、じつと顔を見下ろすと、幼心にも作り物みたいに顔立ちがきれいだと思った。

目を開けたらどうなのだろう。

そう思いながら上から覗くと、気配を感じとったように瞼が上がった。

普段はなんてことのない睫毛が意外にも瞳に影を落として、やさしいのか怖いのか、どんな感じなのかさっぱりわからない。

「……しだ」

くちびるが開くことなくただ動いて、何かつぶやいたけれど聞きとれなかった。無意識に問うように首をかしげた。すると。覗きこんだわたしの頭がつかまれる。驚いて顔を上げようとしたのに、男の人の力は強くてかなわなかった。

やだっ——と叫ぼうと口を開きかけた刹那。口が柔らかいものに触れた。同時にお酒とわかる香り。

何!?

パニックになったすえ、頭の後ろをつかむ手を引つかいた。呻き声がわたしのくちびるに被さる。さらに指先に力を込めた。

「イテっ」

その声と同時に頭を解放されたことと軀を引いたことが重なって、わたしは勢いよく後ろによろけてしまう。

「あっ」

後ろにあつた聖書台に軀の脇がぶつかって、がたがたと音が立った。それから、ちょうど椅子と椅子の間に尻もちをつくようにして倒れた。

椅子にぶつかった左肘がじんと痺れて、うずくまるように左腕を抱えた。すると、通路の向こうで、寝そべっていた男の人が転げ落ちるようにして床に起きあがった。

わたしの目と男の人の目とどっちが大きいのだろう。怖いと思うより早く、そんなことを考えてしまった。それくらいわたしはびっくりしていて、男の人もそうらしい。

「……子供……?」

十二才のわたしから見ると、男の人はすごく大人に見えた。だか

ら、男の人にとってわたしは当然子供に映るだろう……小学生は立派な子供だけれど。そんなばかげたことを思う一方で、男の人のくちびるを見てしまった。

「……ごめんな」

そのくちびるが喋った一言が、さっき何が起こったのかを漠然とわたしに知らせた。それはあまりに衝撃的で、寒さと相まって体が固まってしまう。

「やけ酒飲んで……いや云い訳はだめだよな。それよりケガしてないか」

やけ酒っていうお酒がどんなお酒かは知らないけれど、男の人が近づいてくる、と察したとたん、本能が体に指令した。チャーチチエアがずれるのもかまわず、立ちあがって壁側の通路に出た。

「おいっ、悪かったって。何もしないから慌てるなよっ。転ぶ……っ」

忠告どおり、出口寸前で転んだ。膝をしたたかに打ったけれど、わたしのじゃない足音が聞こえて痛みを感じないくらい、逃げなくちゃという気持ちちがえる。

「大丈夫——おれっ、加藤業仁^{かとうなりひと}っていうんだ。業平商事^{なりひら}って会社に来たらわかるよ。責任取るからっ」

パイプオルガンよりも大きな叫び声は慌てふためいて追いかけてきた。

業平商事という会社も責任を取るというのも意味がわからない。

ただ、それから。

触れたくちびるを思いだすだけで——怖くもなく、忌む^いわけでもなく、なんだろう……鼓動が締めつけられるように痛んだ。

当時は、鍵盤が六段もあるという特別な価値がわからなければ、ずっと燻^{くす}ることになった、胸の痛みの理由もわからなかった。

それがわかるようになって、そして、わたしは今年の春、業平商事にやってきた。

三十二歳。女性の影がないという噂のもと、独身。クールなくらい落ち着いていて、やり手の上司。

そんな情報は、“わたしの見る目”という点ではほっとさせた。

見ず知らずの、しかも小学生にキスするなんていう不屈き者に恋をしたなんて、わたしはわたしを疑っていたから。

けれど。

「^{おおみち}大道さん、これ、総務部に頼む」

わたしを指名した加藤課長は憶えていない。

何より、あの男の人が、日本だけじゃなく世界的に活躍しているこの業平商事の次期社長と期待されているということは、わたしにとって最大のショックだった。

かなわない。でも、せめて気づいてほしいのに。

そんな気持ちが交差して、わたしはつい挑むように自己主張をしよう。

「はい、加藤課長」

書類を受けとりながら、その手の甲にあるひっかき傷が目につく。その痕は消えることがなくて、それがだれだったかは憶えていなくても何があつたかは忘れることなんてないはずだ。

ささやかな喜びがわたしを笑顔にした。

その繰り返し。

そうすると、あの頃よりずいぶんと思いのほつきりして見える、

整った顔が奇妙に崩れる。その何かを追うような眼差しは、少しもおかしくはない。何か云いたそうなくちびるにキスしたくなる。

「預かります」

誘惑を振りきるように一礼した。

三階の営業部から十一階の総務部へとエレベーターで上る。

新人研修のあと希望した営業部に配属されて以来、加藤課長の依頼はわたしに委ねられることが多くて、総務部に行くのもお馴染みになった。四つある、それぞれの課のお局さまたちとも親しく話せるほどだ。

「お疲れさまです」

「あら、礼維^{れい}ちゃん、お疲れさま。また加藤課長？ すっかり“ご指名”ね」

どこか意味深に云われた。

「はい」

書類を渡したあと、ためらうように留まっていると。

「どうかした？」

「あの……お願いがあります」

「何かしら」

OLという職業を飛び抜けた優雅さで、経理課のお局さまが首をかしげた。

何度でも恋をする - 2 -

「大道さん、これ、総務部に頼む」

昼休み間際、電力インフラ課の課長室を出て声をかけると、情報処理班に所属する大道礼維が席を立った。

「はい、加藤課長」

即座に引き受けながらも、彼女はどこか反抗心を感じさせる雰囲気です。

書類を取りにきた彼女は正面に止まると、おれの顎の下までしかない背をぴんと伸ばし、かすかに尖った顎をつんと上げた。いつもこうだ。おれが勘繰りすぎているのだろうか。

彼女は大学卒業したこの春、入社してきたばかりだ。ふわりと波打った長い髪を二つに分けて耳の下で結んでいる姿はまだ学生っぽい。それなのに態度だけはでかい。業平に入ってくるだけあって、仕事の覚えも早く優秀ではある。だが、ここにいる彼女にとって、班長というワンクッションがあるとはいえ、おれは直属の上司であり、年齢にしろ、おれのほうが九才も年上であり、あまつさえ、この業平商事では次期後継者としてあることは承知のはずだ。

なんでだ？

と思っていると、きれいに伸びた指を見せびらかすように彼女は封筒を受けとった。それから――顔を上げると出し抜けに笑顔になった。

……なんなんだ。

この当惑の循環もいつものことだ。

「預かります」

大きな瞳にふっくら気味のくちびるという、あどけない顔に似合

った、たんぽぽの綿毛みたいな声だ。

「ああ」

何気なさを装って端的に返事をする、彼女はかすかに頭を下げて踵を返した。その背中を見送りながらため息をつく。

呼びつけるのはほかの人間でもかまわないものを、あの笑顔が待っているから、つい呼んでしまう。

だめだな。

意味もわからずつぶやいて、自分の手の甲を見下ろす。筋になつて残ってしまった傷が罰を与えるかのように疼く。なぜそうなるのか、やっぱり訳がわからず、おれはまたため息をついた。

課長室に戻ってまもなく正午になると、秘書は社員食堂へと昼食を調達しにいった。課長代理である水辺が一区切りついて伸びをする。

「加藤課長、身持ちが堅いのもけっこうですが、もうそろそろ身を固められてはいかがです？」

斜め向かいのデスクにいる水辺は、いきなりプライヴェイトなことに触れた。

現社長でありおれの父親である、加藤業弘なりひろのまわし者かという発言は、いま気の利いたふうに云った水辺に限らない。三十二歳になつても一向にその気がないと思つている創業者一族は、おれの結婚についてやきもきしているのだ。

なぜいまそんな話題になるのかといえば、おそらく今日がクリスマスイヴだからだろう。今朝、予定がないと云ったばかりだ。

「よく云われる。まだ考えられない」

「ですが、課長のお子さんはいずれ我が社を継がなくてはなりませんし」

水辺は生まれてもない子供の話を持ちだし、おれは苦笑いを浮かべた。

「余計なお世話だ。将来に子供がいるとしても、おれは後継を強制

するつもりはない。世襲が当然といった時代じゃないだろう」

「ですが……」

「またもや『ですが』を口にした水辺は、やはり父の手下だろう。有能なゆえに一目置かれているのはさておいて、おれより年下とはいえ、自分が二十九歳という適齢期でありながら独り身であるということを棚上げしている。」

「ふーん、だれでもいいのか？」

「こうなれば」

おれの言葉を前向き発言と取ったらしく、水辺は無責任にも深くうなずいた。

あいにくと、おれにとって『だれでもいい』とはけっしてならない。その気がないわけではけっしてなく、できない理由がある。

父に反抗して進んでいた就職活動をことごとく妨害されていた大学三年の冬。いまとなつては、なぜあのときに女の子を探さなかったのか、後悔している。ただ、おれが追うことで怖がらせなくなつた。

もう探そうとしたところで、あの頃の面影は消えているかもしれない。もし見つかったとしても、変人扱いされるのが落ちだ。一歩間違えればストーカー容疑で逮捕に及ぶ。自分でも律儀すぎる気がしている。半ば……いや、百パーセントに近く、もう会うことはないとあきらめた。

あきらめた、という気持ちのもとがなんなのか。それは自分が異常者のような気がしてあんまり認めたいものではない。

「そのうち、な」

曖昧に答えたはずが、水辺は目を見開く。

「結婚なさるんですね！」

明らかに勘違いした発言が云い終わるや否やのうちに小さなノックの音が立ち、「失礼します」とあの声が侵入してきた。

責めるような眼差しで見られていると思うのはおれの錯覚か。

「これを預かってきました」

その声はいつになく堅苦しい。

「ああ。ありがとう」

手渡しで受けとった——つもりが、抵抗するように彼女の指に力が入ってすんなりは受けとれなかった。問うように見上げたたん、彼女は封書から手を離す。出ていくかと思いきや、今度は不自然に留まっておれを見下ろしてきた。

どうかしたのか。そう訊こうと口を開きかけると、彼女はそれをさえぎるように一礼をして課長室を出ていった。

なんだったんだ？

そう思いながら閉まったドアを見つめ、それから手もとの封書に目を落とした。

『親展』

そう書かれた封を開けると、入っていたのは明らかに仕事ではない“招待状”だった。

何度でも恋をする - 3 -

夜の八時まえ五分。

招待どおり、ビジネス街から裏へと入った通りをずっと奥に歩いて、目当ての店を見つけた。店に入ると、ドア鈴の音と一緒にピアノ曲が聞こえてくる。

二歩なかに進むと、はじめて入ったおれを見て、マスターとおぼしき、五〇歳くらいのスマートな男が手招きする。

「コートはそこだ。何を飲む？」

年中、そうなのか、カウンターの向こうに渋面でいるマスターは、出入り口の傍にあるコートかけを指差して訊ねた。

「ノンアルコールならなんでもいい」

マスターは鼻で笑い、背を向けて勝手によそい始めた。

コートをかけてから空席のカウンターに戻ると、スツールに腰を引っかけた。それから、ゆっくりと店内を見渡した。

いかにも常連が多そうな感じで、ピアノを囲むように配置したテーブルが六つしかなく、こぢんまりとしたピアノバーだ。そのテーブルもいまは一つしか空いていない。逆に、テーブルが空いているというのに、グラスを手に持ち、壁にもたれて立ったまま話している奴もいる。クリスマスイヴのせいかな男女のカップルだらけだ。

中央にあるランドピアノはぴかぴかしていて、異質なくらいの存在感がある。弾いているのはほっそりした女性だ。ふわふわと長い髪をおろしているせいで、角度的にここから見えるはずの横顔もわからない。

「どうぞ」

飲み物が出されるのはわかっていたはずが、勧められた声はとうとうに感じた。思いのほか自分がピアニストの指先に見入っていたと気づかされる。

向き直ると、でこぼことカッティングの洒落たグラスが目のまえにあつて、気泡が立っている。なんの炭酸水かと一口飲んでみれば、胃が焼けるようにかつとした。

酒が嫌いなわけではない。飲まなくなっただけのことだ。付き合ひの必要上は飲むものの、口をつける程度で、それだけにいま酒の効力は増す。

「マスター、なんの酒だ。飲まないって云ってる」

「やけ酒だ」

「……」

にやりとしながら訳のわからない返事が来て、おれは怪訝に眉をひそめる。

それから口をつけずに意味のない抵抗をして待った。

何を待っているのか。それは招待した人物だ。ただかかはわからない。

名無しの招待状を持って、大道礼維のところに行けば、総務部から預かりました、とつつけんどんに返され、総務部に行けば、とある方からの依頼です、としか云わない。そのうえ、行け、の一点張りだ。社運がかかっているという脅しまでかけられた。

暇潰しが必要なほど暇ではないが、総務部が仲介しているとあれば怪しいこともないだろう。取引先か何かの接待か、そう考えつつやってきたものの、約束の八時をすぎてもなんの音沙汰もない。

帰るか。

十分を待つてそう決め、躰ごとスツールをまわした。

「マスター、いくら——」

つと、口を噤んだ。

どこかで聴いた曲が流れてきた。ジャズ調にアレンジされているせいだろう、なんの曲かとっさには思いだせない。けれど、やけに

気になる。

「マスター、彼女、話しかけていいかな」

考えるよりさきに訊ねていた。マスターは渋面を崩し、おもしろがった表情で肩をすくめた。つまり、どうぞということだろう。

スツールをおりると、奥のピアノに向かった。演奏の邪魔にならないよう、彼女の斜め後ろで待つ。と、その姿勢はだれかと似ていると思った。

だれだ？

そう思いながらピアノを奏でる指先へと目を落としたとたん、“もしかして”と“まさか”という言葉が交差した。

動悸がするのは気のせい。彼女の指がふわりとピアノから離れ、ゆっくりその脚に止まると。

「大道さん？」

ここでも考えるよりさきに口をついて出た。

椅子をおり、二〇センチほど段差があるステージをおりた彼女は目のまえに来て立った。おろした髪に、ステージ衣装なのか、身に若干フィットしたミニワンピースという姿が昼間より大人っぽく見せている。

「加藤課長、わたし、クビですか」

「なぜ？」

「大学からの名残で、たまにここでバイトしてます」

「さっきの曲、何？」

答えるかわりに疑問を投げかけると、彼女はちよつとおれを見つめたあと、ためらうように首をかしげた。

「“アメージンググレイス”っていう賛美歌です。……知ってますか」

「いや、聞いたことはあるけど曲名まで知らなかった」

すると、まずいことを云ったあのような、どこことなく不自然な沈黙が漂う。その緊張を緩和させるように、店内のスピーカーから

ピアノ曲が鳴りだした。

彼女を見ていると奇妙な感覚に襲われる。忘れたくない、いや、忘れられなかった面影を忘れてしまいそうになる。

「加藤課長、来て」

彼女は部下らしからぬ言葉遣いで誘い、おれが座っていたカウンターへ行く。

爪先立って腰をひよいとあげ、やっとスツールに届いた彼女は、中身が少しも減っていないグラスを見て顔をしかめた。——というよりは、かげらせた、か？

それから顔を上げた彼女は、あの挑むようなしぐさで顎をしゃくった。

「飲んで」

「飲まないんだ」

「……これじゃなかった？」

「何が」

「やけ酒」

マスターと同じことを云う。

「意味がわからない」

今度こそ彼女はあからさまに顔をかげらせた。

「大道さん」

「今日は、礼維って呼んでくれたら嬉しいかも。クリスマスプレゼントはそれでいいから。お返しも欲しいならあげる」

彼女は砕けた云い方で強引だ。気分がころころ変わるのは彼女らしいといえば彼女らしいのだろう。

「招待状は大道さんが？」

そう訊ねると、拗ねたように彼女はそっぽを向く。何を見ているのか、そのまま横顔を見せていた彼女は、不意におれのグラスを取って口をつけた。そして、ごくごく喉を鳴らして味わうもへったくれもなく飲み干した。呆氣に取られていると。

「マスター、おかわり！」

その様子はまさに、彼女が口にしたやけ酒だ。

「礼維ちゃん、あんまり強くないんだからむちゃやるな。それに、お酒はやけじゃなく、味わって飲むもんだ。お酒に失礼だろう」

「じゃあいい、帰る。マスター、お酒はバイト代から引いてて。加藤課長もわざわざ来ていただいてありがとうございます」

慇懃無礼に云い、彼女はスツールから飛びおりて出入り口へと向かう。ドアの横にあるコートかけから、もこもこしたジャケットを取って袖を通し始めた。

「送るよ」

「はい、礼維ちゃん」

おれが傍に寄ったのと、マスターが彼女のものらしいバッグを持つてきたのは同時だった。

「ありがとう」

マスターへとお礼を口にした彼女は、おれのほうを向いた。

「平気です。いつも独りで帰ってますから」

彼女はおれを突っぱねて、背中を向けるとドアを開いた。冷たい風が店内に入る。おれはマスターの手に一万円札を押しつけると、「楽しいクリスマス」という、にやついたふうの呼びかけに見送られながら外に出た。

「平気だろうが送っていく」

背後から声をかけると彼女は足を止めた。それから、くるりとこつちを向いて、下からまっすぐにおれを臨^{のぞ}んでくる。

「“業仁”さんの家に連れてってくれるなら、そのあと送られてもいい」

時が止まった。

そんなはずはないが、そう思う空気感がふたりの間にはびこる。あれが見られるなら。

そんな誘惑に駆られる。刹那。

「わかった」

無意識に答えていた。

取り消そうかという一瞬の迷いは、直後の、待っていた笑顔に消えた。

「じゃあ、連れてって」

*

タクシーに乗っている間、まるで緊張しているように彼女の口数は少なかった。おれが話しかけ、相づちを打つといった感じだ。おれにしろ、自分の決断がどういうことになるのか落ち着かなく、気を遣う努力を途中で放棄した。よって、車中はタクシーの無線音だけが耳障りに響いていた。

「女の人の気配ないけど……噂どおり？」

やっと口を開いたかと思えば不躰な質問だ。独り暮らしのマンションに連れてくるなり、彼女は詮索するように部屋を眺めていたが、そういうことをチェックしていたらしい。

「家は聖域だ。それで、どんな噂だ？」

「女嫌いだって」

おれは吹くように笑った。

「拳げ句の果てに男好きって云われてないよな？」

「それはないけど。でも……」

彼女はまたそっぽを向く。

「でも」、何？」

「結婚、しちゃうんですね。それなのにイヴが空いてるとか、わたしを家のなかに入れるとか、やっぱり無関心で冷たい」

結婚という噂までがあるのかと驚き、そして、不当な云いがかりに呆れたが、それよりは『やっぱり』という彼女の云い方と、それ

に繋がる『無関心で冷たい』が妙に引つかかる。自分に淡々としたところがあるのは否めないが、冷たいと断言されるほど人当たりが刺々しいはずはない。

「やっぱり？」

「……せつかくがんばって業平目指してきたのに……。社長になるの？」

彼女ががんばって業平に就職できたことと、おれが社長になることの繋がりがわからない。

「そのつもりだ」

「……そうなんだ」

彼女は心底から気落ちした様子で、もしか泣くのではないかと思っ

「昔は逆らってたな。後を継ぐつてのはきついんだ。特に三代めとなると、苦労を経験してなくて潤った時代しか知らないから厳しい目が向くし、親からの期待はプレッシャーでしかない。なんとかルールをずらそうとして荒れてた頃があった」

何をばかみたいに告白しているんだ？ そう思いつつも、彼女から泣きそうな表情が消えると、打ち明けてよかったとほっとする。

「大学のときも？」

どこか納得した声音で、しかも、なぜ大学と限定されるのかはわからないが、おれはうなずいた。

「ああ。けど、その大学のときに覚悟を決めたんだ。贖罪^{じゅぐわい}だな」

「贖罪？」

「神様のまえで罪を犯したから。業平にいないと罪滅ぼしは叶わないし」

そう云うとせつかく和らいだ表情が一転、彼女は責めるように睨みつけてきた。そうされる理由はまったく見当がつかない。

「贖罪とか罪滅ぼしとか、くそ喰らえ」

彼女はつぶやくように暴言を吐いた。

それらの言葉が彼女となんの関係がある？

戸惑ったとたん。ぽろりと彼女の目から水滴が落ちた。

なんだ？

疑問に思うのと同時に躰が疼いた。

手が勝手に動いて水滴をすくい、濡れた頬をくちびるが拭う。

触れてしまった——と、また罪を犯した気分になるのはなぜだ。

が、そのためらいも衝動を止めることはかなわず、それどころか彼女をさらった。

逆らうこともなく、彼女は反対にしがみついてくる。

あれ以来のキスはぎこちなかったかもしれない。

欲求が迸り、性急で乱暴になってしまったかもしれない。

ただ、寒い夜にもかかわらず、おれは触れた体温に満ち足りた。

漠然とそう感じる眠りだった。

それなのに、朝になると彼女は消えていた。

夢じゃなかったと教えたのは、広いベッドの真ん中に残った、昨

夜、おれが察したとおりの、一滴の赤いしるし、だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8580z/>

眠れないほど好き 業平商事シリーズ

2011年12月28日12時49分発行